

令和6年度 和歌山大学 e-annual report

＜ダイジェスト版＞（分析コメント含む）

令和7年9月

目次

1. はじめに	P2
2. 入学時・入学直後の情報	
2－1 入学者選抜の状況	P3
3. 在学中の情報	
3－1 各授業科目における到達目標の達成状況	P7
3－2 各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）	P12
3－3 学修時間	P17
3－4 教員一人あたりの学生数	P20
4. 卒業時・卒業後の情報	
4－1 学位の取得状況	P21
4－2 学生の成長実感・満足度	P24
4－3 学位プログラムを通じた資質・能力等の修得状況	P28
4－4 進路の決定状況等の卒業後の状況（就職率や進学率等）	P35
4－5 修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率	P36
4－6 卒業生からの評価	P42
4－7 卒業生に対する評価	P52

1. はじめに

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成 30 年 11 月 26 日中央教育審議会答申）において、高等教育改革の実現すべき方向性として

・高等教育機関がその多様なミッションに基づき、学修者が「何を学び、身に付けることができるのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行っていること

などが掲げられ、「学修者本位の教育の実現」が謳われています。

和歌山大学においても、本学が有する強みと特色を生かして、「何を学び、身に付けることができたのか」という学修者本位の視点に立ち、学位プログラムについて日常的な点検（モニタリング）を行うとともに、総合的な点検・評価を行い、その結果をもとに教育改善に努めています。

点検・評価を行うためのデータ・情報のうち、学生の学修成果や大学全体の教育成果に関する情報について、『e-annual report』としてホームページで公表しています。公表に当たっては、「入学前・入学直後の情報」「在学中の情報」「卒業時・卒業後の情報」「その他の情報」に分類することで、情報の検索が容易となるよう工夫するとともに、ホームページでは最新データをご確認いただくことができます。当冊子は＜ダイジェスト版＞として年度毎に事項を抽出してとりまとめたものです。

<和歌山大学ホームページ：e-annual report>

https://www.wakayama-u.ac.jp/about/public_information_gallery/education-information/qualityassurance/index.html

2. 入学時・入学直後の情報

2-1 入学者選抜の状況

入学者選抜については、「入学者受入れの方針」を定め、これに則して大学として求める資質・能力を有する者を入学者として適切に選抜しています。

和歌山大学学士課程 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

1. 求める学生像

高等学校あるいはこれに相当する教育機関等における学習や活動を通して、次の知識・技能、能力、態度を有する人を求める。

(1) 知識・技能

- ・ 本学での学修に必要となる知識・技能を有する人

(2) 思考力・判断力・表現力

- ・ 課題解決に取り組むための基礎となる思考力・判断力・表現力を有する人

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

- ・ 多様で広い知的関心を持ち、他者と関わって、主体的に学ぼうとする意欲や態度を有する人
- ・ 身につけた知識や技能を活用し、課題解決に取り組む意欲や態度を有する人

【入学後の期待】

入学時に求められる知識・技能、能力、態度をもとに、各学部・学環の専門教育及び教養教育を学修することができるレベルにまで資質・能力を高めることを期待する。

2. 入学者選抜の基本方針

本学が求める資質・能力を適切に評価するために、各学部・学環の特性を踏まえた選抜方法により実施する。

全学の「入学者受入れの方針」に加え、学部等の学位プログラム毎にも「入学者受入れの方針」を定め、これに則して入学者を選抜しています。

（参考）各学部の入学者受入れの方針

<https://www.wakayama-u.ac.jp/admission/admission-policy/index.html>

「入学者受入れの方針」に則した選抜が実施されているかを明らかにするため、入試方法の区分に応じた受験者数、合格者数及び入学者数等を以下に示します。

▶ 受験者数、合格者数、入学者数等について

一般選抜前期日程_実績一覧_学部別

学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	70	152	2.2	122	1.7	77	63.1%	71	92.2%
経済学部	170	402	2.4	380	2.2	196	51.6%	167	85.2%
システム工学部	170	370	2.2	331	1.9	190	57.4%	169	88.9%
観光学部	60	182	3.0	148	2.5	65	43.9%	61	93.8%
社会インフォマティクス学環	20	30	1.5	22	1.1	20	90.9%	19	95.0%
合計	490	1,136	2.3	1,003	2.0	548	54.6%	487	88.9%

一般選抜後期日程_実績一覧_学部別

学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	20	184	9.2	52	2.6	32	61.5%	25	78.1%
経済学部	80	817	10.2	389	4.9	111	28.5%	94	84.7%
システム工学部	110	683	6.2	287	2.6	158	55.1%	99	62.7%
観光学部	5	121	24.2	121	24.2	9	7.4%	4	44.4%
合計	215	1,805	8.4	849	3.9	310	36.5%	222	71.6%

上表の各数値は、属性に該当する実数を表す。

※1：志望倍率＝志願者数／募集人員数

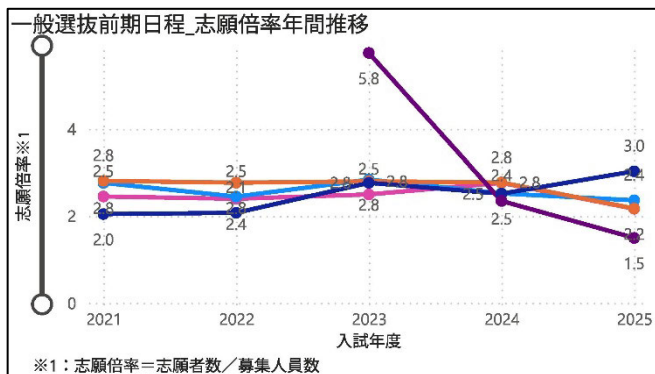
※2：実質倍率＝受験者数／募集人員数

※3：合格率＝合格者数／受験者数×100〔％〕

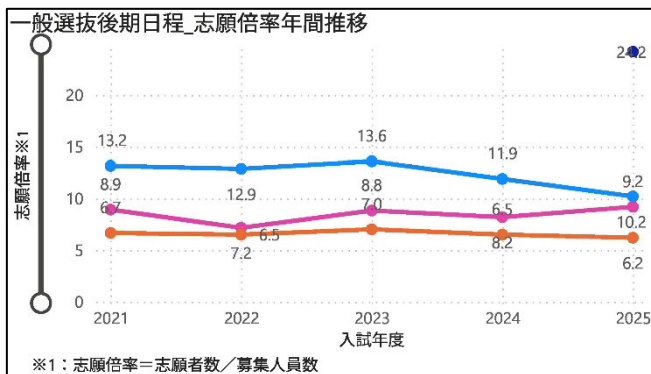
※4：入学率＝入学者数／合格者数×100〔％〕

<一般選抜前期日程 志望倍率年間推移>

学部・学環 ●教育学部 ●経済学部 ●システム工学部 ●観光学部 ●社会インフォマティクス学環

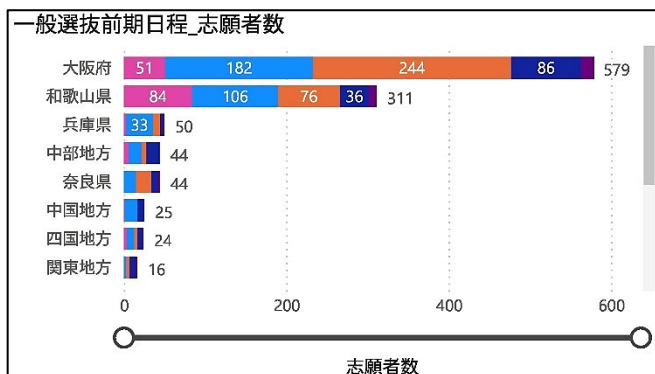


<一般選抜後期日程 志望倍率年間推移>

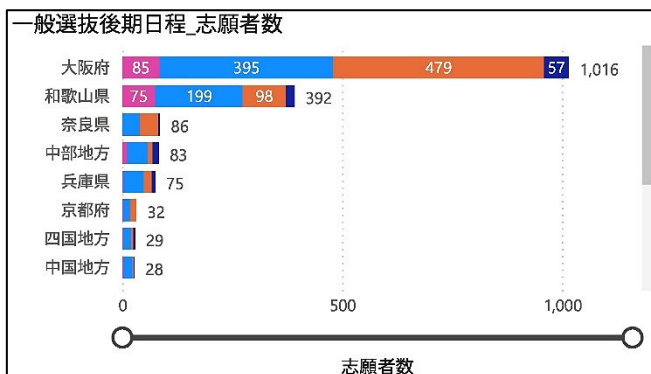


<一般選抜前期日程 志願者数>

学部・学環 ●教育学部 ●経済学部 ●システム工学部 ●観光学部 ●社会インフォマティクス学環



<一般選抜後期日程 志願者数>



【分析状況】

2025 年度入試データの分析 大学全体の受験者数(総受験者数)は、前期選抜は減少傾向、後期選抜はほぼ横ばいである。実際、2025 年度前期選抜の総受験者数(1003 名)を過去 4 年間(2021～2024 年)の平均値(1198 名)と比較すると約 16%減少している。また 2025 年度後期選抜の総受験者数(849 名)を 4 年間平均値(834 名)と比較すると若干(約 2%)の増加となっている。一方、合格者のうち入学した者の割合はやや減少傾向にある。実際、2025 年度前期選抜では 89% であり、4 年間平均値(91%)から若干減少している。2025 年度後期選抜では 72% であり、4 年間平均値(74%)からやはり若干減少傾向にある。「前期選抜の受験者数」および「合格者のうち入学した者の割合」の減少傾向の主な原因として少子化や大学入試の早期化近隣の中期日程大学の授業料無償化などが考えられる。「後期選抜の受験者数」がやや増加傾向になった原因として、観光学部で後期選抜が 2025 年度に再開した影響が大きく、観光学部以外の 3 学部では前期選抜と同様に減少傾向が見られる。

都道府県別の入学者数の割合では、大阪府と和歌山県からの合計入学者数の割合が約 80%と大きい、前年度までと比較すると大きな変動はない。実際、2025 年度の大阪府からの入学者の割合は前期 51%、後期 61%(4 年間平均はそれぞれ 48%, 62%) である。また、和歌山県からの入学者の割合は前期 28%、後期 19%(4 年間平均はそれぞれ 29%, 18%) である。このように、依然として和歌山県と大阪府からの入学者が多く、これらの地域の高校生には本学がよく認知されていると考えられる。

2024 年度の取組と 2025 年度以降の取組 2024 年度入試のデータ分析結果を踏まえて、志願者・入学者を確保するため、2024 年度も高校におけるガイダンスや進学相談会などへ多数参加し、本学の特色や魅力を発信することに努めた。アドミッション・ポリシーに基づく多様な選抜方法を広く周知することにも注力した。さらに、本学が求める資質・能力を適切に評価し、多様な志願者を受け入れるため、選抜方法や入学定員の検討も進めた。その結果、複数の学部で入学定員の修正を行った。2025 年度以降も、精力的な入試広報と入試制度の検討を継続するだけでなく、広報内容の精査や入試データの詳細な分析が必要である。

また、大阪府・和歌山県以外からの入学者を得るための取組として 2024 年度は、大阪府・和歌山県以外の生徒も参加しやすいオンライン説明会で広報活動を行った。2025 年度以降も、本学の特色・魅力を広く発信するため、オンライン説明会への参加やホームページによる情報発信などの広報戦略を練ることが不可欠である。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	前期・後期とも和歌山県と大阪府からの志願者が大半を占めていることはここ数年変わらない。2025 年度入試から定員が 30 名減少となったが、志願倍率も減少となった。この原因として前年度(2024 年度)入試の倍率が高かったことの影響が考えられる。地域における教員養成を担う学部として教員採用率及び小学校教員占有率の向上を目指し 2016 年度、2023 年度入学者より推薦入試において地域枠(2016 年度「地域【紀南】」、2023 年度「きのくに教員」)を導入した。一般入試選抜においてもより一層の志願者増加のために、アクションターム導入などの新カリキュラムの特色を入試広報等により広く丁寧に説明していく。そのためにもアクションタ

	ームのよりよい活用を探っていきたい。教育学部への志願者微減の全国的傾向がある中、こういった入試の方法やカリキュラムの改革を通して、入試倍率の維持にも努めたい。
経済学部	志願倍率では、全ての募集単位のなかで、一般選抜の後期日程が最も高く、9 倍～13 倍の中で推移しているが、近年の傾向としては低下傾向にある。また前期日程では、2.4 倍～2.8 倍の中で推移しているが、近年の傾向としては低下傾向ではある。しかし、国立大学全体で見ても、前期日程の志願倍率は同期間で低下傾向にあり、本学と同様の傾向となっている。後期日程については、国立大学全体では志願倍率は上昇傾向にあり、本学部の近年の傾向は逆となっており、今後の動向を注視する必要がある。 ちなみに、2025 年度は、多くの選抜において、志願倍率は前年度と比べて低下しているが、学校推薦型選抜および学校推薦型選抜（スポーツ）は上昇している。一般選抜における志願倍率の低下の要因などについて、今後検討を行い、改善に努めていきたい。
システム工学部	近隣の複数高校への訪問説明や生徒に向けた進路説明会を積極的に実施してきたが、2025 年度入試の志願倍率は、前期・後期日程ともに低下した。これは、少子化以外に、2025 年度入試から前期・後期日程ともにそれぞれ入学定員を 10 名増員した影響が考えられる。一方、後期日程では入学率がこれまでの傾向から外れ大きく低下した。こちらは、近隣の中期日程大学の授業料無償化の影響も少なからず考えられる。いずれにせよ、本学部の魅力をさらに高めるとともに、和歌山や大阪南部以外にも拡大して広報に努めたい。
観光学部	コロナ禍に見舞われた 2020～22 年度に減少した前期日程の志願者数・実質倍率は 2023～24 年には持ち直し、2025 年も引き続きコロナ以前の状態へ戻りつつあると考えている。コロナ禍が落ち着きを見せ、国内外の人々の移動行動・旅行行動が社会に様々な影響を与えていることで、社会の観光関連産業に対する認識の変化が、より一層反映されてきたものと考えられる。2025 年より再開された後期日程については、1 年目の結果として、ほぼ想定の範囲内の志願者数・志願倍率であった。今後もすべての入試区分において、志願者数などの動向を注視しつつ、入試広報や選抜方法の改善を進めていきたい。
社会インフォマティクス学環	2025 年度の一般選抜（前期日程）では志願倍率が減少した一方で、学校推薦型選抜では志願者数が 23 名増加した。この原因には、全国的なデータサイエンス分野に関連する学部等の新設が進む状況が考えられる。今後、オープンキャンパスや入試説明会、学環独自の説明会、県内外の高等学校への訪問などを通じて、本学環の特色について、より積極的な広報に努めるとともに、一般選抜の科目ごとの配点の見直しを行う。

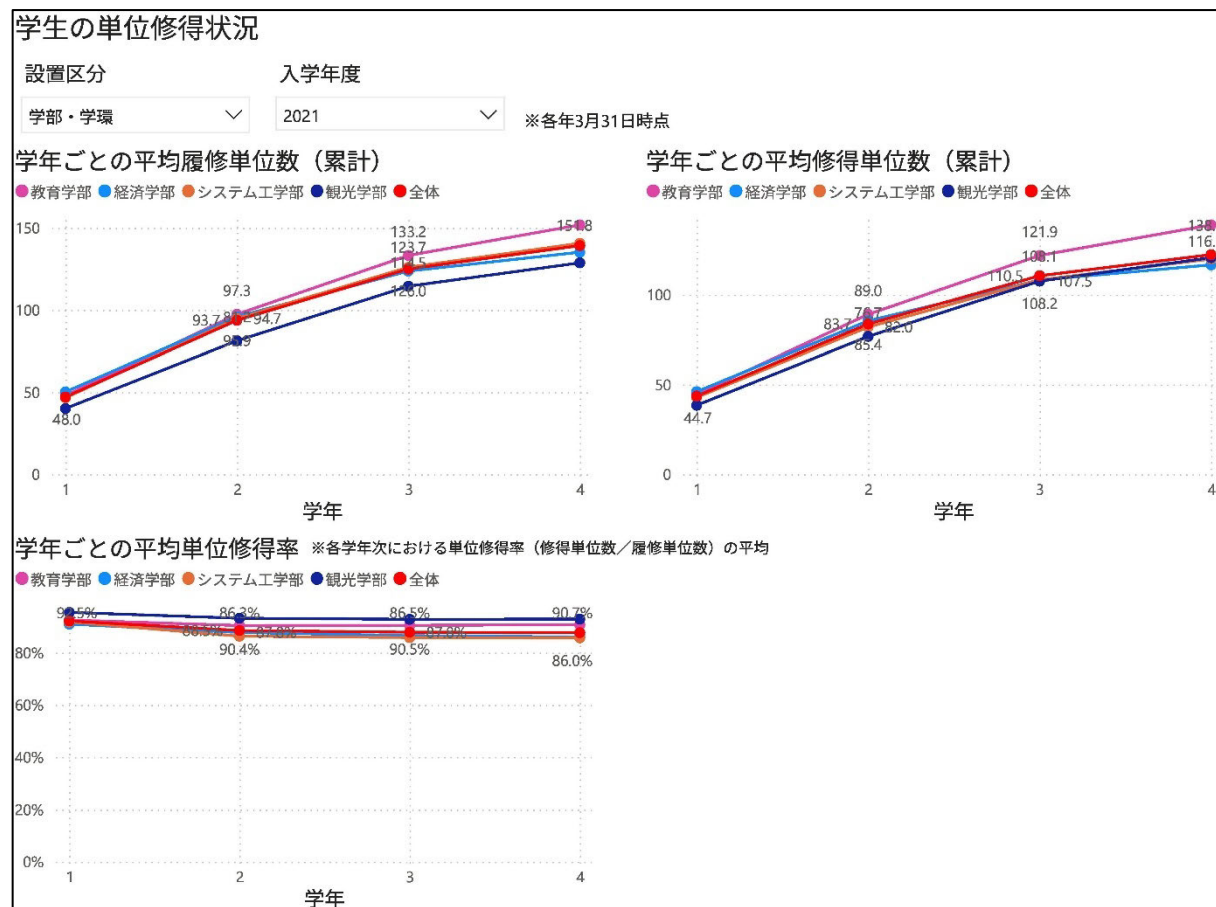
3. 在学中の情報

3-1 各授業科目における到達目標の達成状況

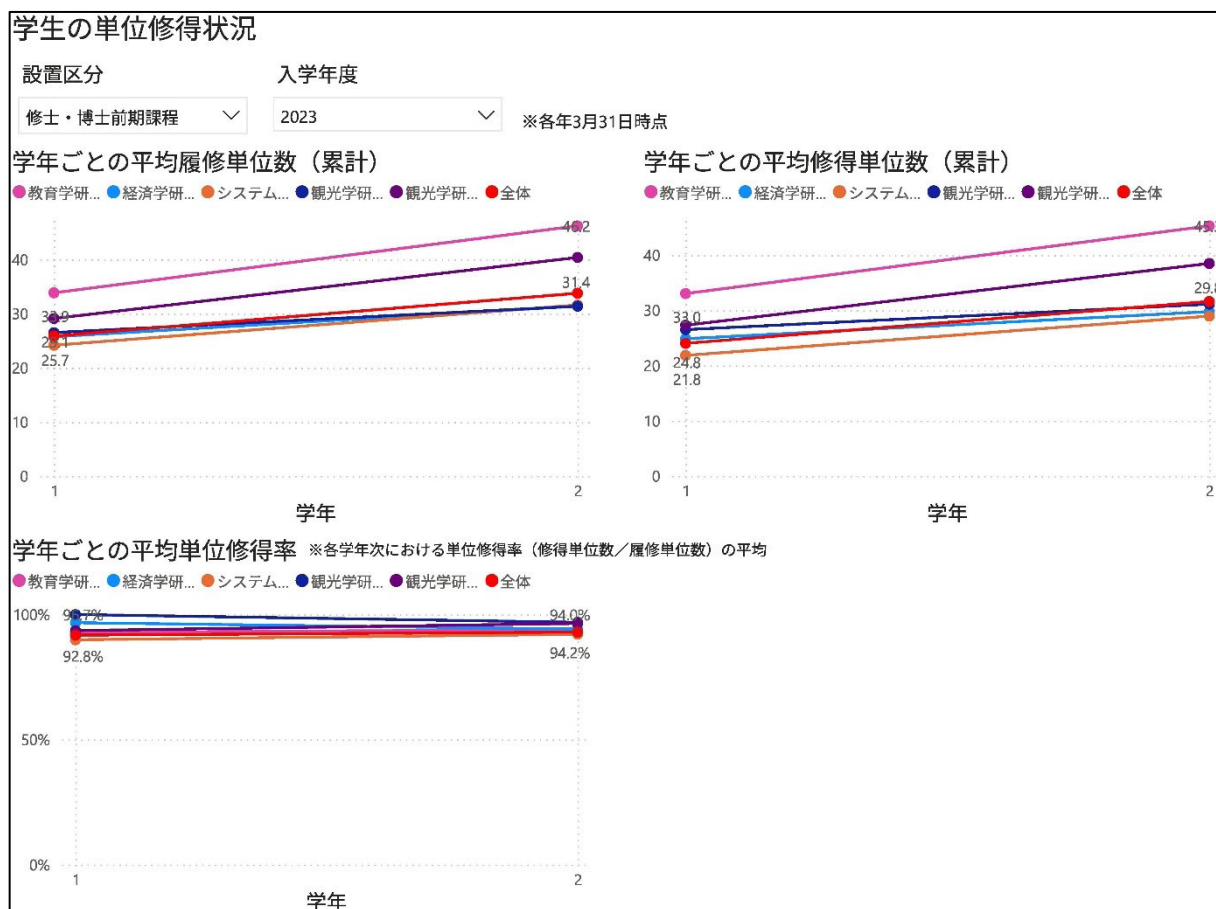
学生が、個々の授業科目の履修の結果として「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力を獲得してゆく過程の全体的な状況を明らかにするため、入学年度別・年度毎の単位修得状況等を以下に示します。

▶ 入学年度別・年度毎の平均履修（修得）単位数について

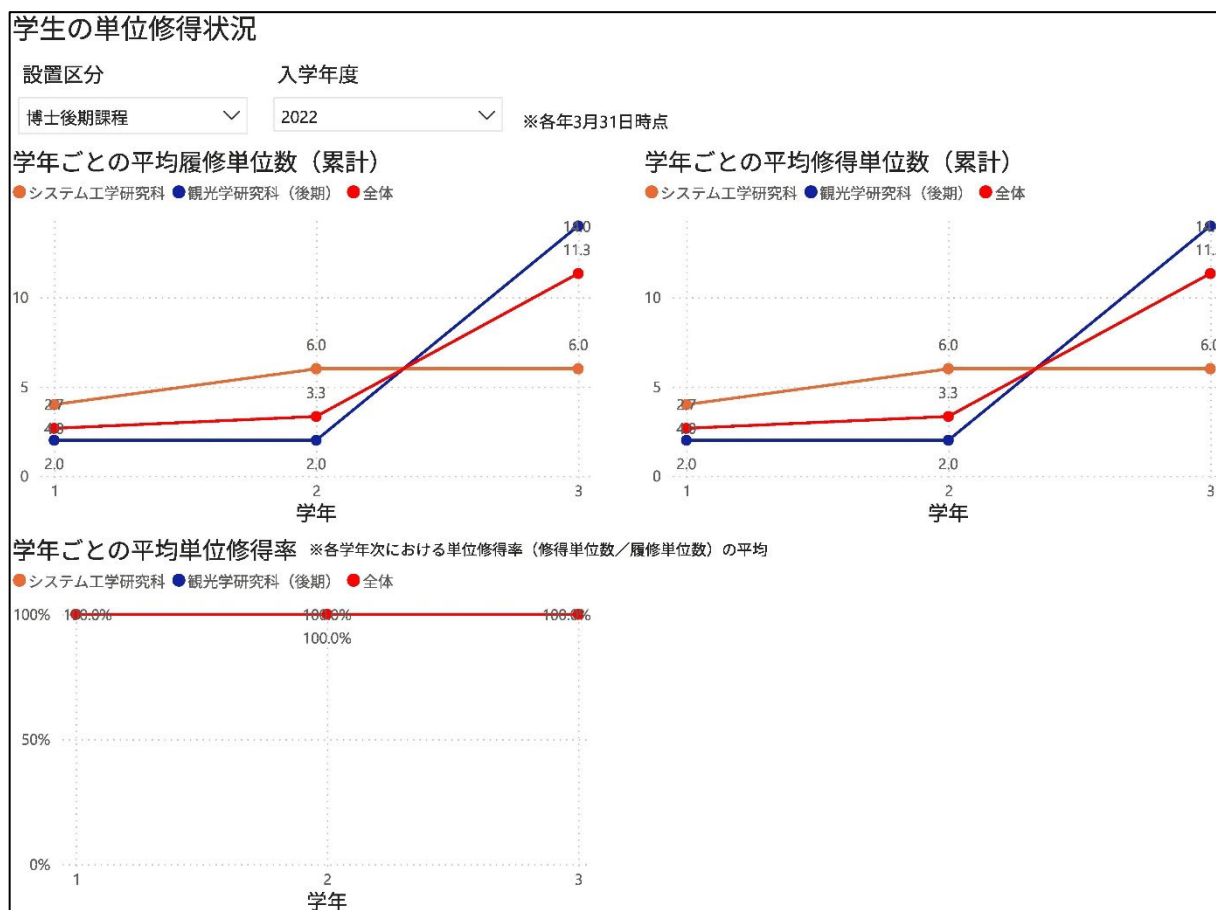
<学部>



<修士・博士前期課程>



<博士後期課程>



【分析状況】

学部・研究科ともに例年と大きく状況は変わっていない。継続的な検証・改善のマネジメント活動が重要である。

学部については、CAP 制による履修上限単位数が少ない部局の平均単位修得率がやや高くなっていることから、その有効性がある程度認められる。2 年次以降に平均単位修得率の低下傾向が大きい部局では履修上限単位数の検討も必要であろう。一部の学部がカリキュラム改編により上限単位数を減らしているので、その効果を確認する必要がある。

研究科については、学生の単位修得数と単位修得率は概ね良好である。ただし、各研究科のカリキュラムが学位論文の提出に適切につながっているのかについては、引き続き検討をしていきたい。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、他の 3 学部と比べて平均履修単位数が高い傾向にある。特に、学年が上がるにつれ高くなっている。それでも平均単位修得率は他学部等と同じ高さを維持している。CAP 制があるが卒業要件としての免許状取得単位に加え、卒業後の就職（主に教員）を見通すなかで目標を明確に定めつつ副免許取得の単位を修得する傾向があり上記の結果につながったと考えられる。単に単位修得のみを目指すのではなく学修内容をより深く理解するよう、引き続き指導を行いたい。
経済学部	平均単位修得率は、異なる入学年度の同一学年で比較すると低下傾向にある（例、2 回生：2020 年度入学：89.3%、2021 年度入学：87.8%、2022 年度入学：86.1%、2023 年度 84.4%）。この原因は、特に前期日程の志願倍率が低下傾向にあることと関連している可能性がある。大幅な数値の低下ではないため、継続的に変化の動向を注視していく。
システム工学部	システム工学部では平均単位修得率が 90%を下回っているが、これは必ずしも学部全体の質や学修意欲の低下を示すものではないと考えている。工学部は実験や実習が多いため、座学だけでなく、実践的な実技が求められる場面も多い。そのため、単位修得率が多少低くても、学生は実践的な能力や技術を習得している。具体的には、実習や演習の単位修得状況は、講義の単位修得状況に比べて高い。平均単位修得率は 1 年次の 92%から徐々に減少し、4 年次には 85.7%となっているが、大きな変化は見られず、各学年におけるカリキュラム構成には問題がないと考えている。 また、システム工学部は、2023 年度に 10 メジャー制から 8 メジャー制へカリキュラムを大きく変更し、さらに、履修単位数の上限を従来の 26 単位から 24 単位に減らした。今後の状況について注視していく必要があると考えている。

観光学部	やや厳しめに CAP（履修単位数の上限）を設定しているため、学年ごとの平均履修単位数は相対的に低めの水準であるが、平均修得単位数は平均的な水準となっており、平均単位修得率は他学部と比較して高めの水準にある。学生自身の関心やコース等の志向に応じて堅実に科目を履修する学生が多いと考えられるが、昨年度までと同様、卒業に必要な単位数までしか履修・修得しない学生も多く、GPA への影響を心配する学生の声も聞かれることから、来年度からの新カリキュラムの導入に際し、自らの知的関心に応じて科目履修に積極的にチャレンジできる工夫も含め、検討を進めている。
社会インフォマティクス学環	一年生と二年生の平均修得単位数が共に 9 割を維持していることから、学年の進行に伴う学修内容の進展や複雑化に応じ、学生が自身の学修状態を把握し、必要な学修時間を適切に調整していると考えられる。今後も、自ら学修目標を定め、見通しを持って、主体的に学修に取り組めるよう、学期の事前・事後の機会に、自身の学修状況の分析を促す。また、学生個別の履修相談を実施する。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、平均履修単位、平均修得単位数が他研究科等より多く、教職実践力を獲得するという学修の目標が明確であるため集中して単位修得に向かうことができたと考えられる。さらに約半数が現職教員（県派遣等）であり現任校での課題が明確で、それに対する解決策を導き出すため自律的かつ積極的に学修に取り組んだものと考えられる。加えてカリキュラム上、現職とストレートマスターとの共同の学びが多く設定されており相互に学びを高め合う仕組みがあったことも単位修得につながったと考えられる。引き続き、高い平均履修単位・平均修得単位を維持するよう取り組みを進めたい。
経済学研究科	1 年次の平均単位修得率は、2022 年度入学者が 98.1%、2023 年度入学者が 96.7%、2024 年度入学者が 95.7%となっている。2023 年度入学者の割合がわずかに低下したが、2024 年度入学者は同程度の水準を示すようになっている。多くの学生が 1 年次に専門科目の単位をほぼ修得しており、さらなる修得率の向上に向け、専門科目の体系的な学修の促進に努める。
システム工学研究科	ほとんどの学生が適切に履修計画を立てているため、単位修得率も高いことがわかる。また、研究科においては、学部のカリキュラムとは大きく異なるアプローチが採られている。具体的には、主要な講義科目に関しては、1 年次の終わりまでにほとんどの学生が単位を修得しているのが特徴である。これにより、2 年次に入ると修士論文の研究に重点を移すことができている。以上からカリキュラム構成には問題がないと考えている。

観光学研究科	博士前期課程・専門職学位課程とも、年ごとの平均履修単位数及び平均修得単位数の状況は、全体の数値との大きな差が見られない。また年ごとの平均単位修得率もほぼ全体と並んでいる数値である。いずれも授業科目の年次配当どおりの履修（修得）単位数となっており、単位数の面において学位取得の条件を満たす学修ができています。博士後期課程の単位修得状況に関しても、観光学研究科は全体の数値に近い傾向である。授業科目の年次配当どおりの履修（修得）単位数となっている。これらのうち、博士前期課程については、カリキュラム変更の影響が来年度以降表れてくる可能性があり、その動向を注視したい。
---------------	--

3-2 各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）

学生が単位を修得した各授業科目における到達目標の達成状況について、当該科目の到達目標、到達目標と「卒業認定・学位授与の方針」との対応関係、成績評価基準及び成績評価手法などを公表することが望ましいとされています。

本学では、これらの情報をシラバスへ記載し学生へ周知するとともに、各学期の授業評価アンケートで実施状況の確認を行っています。

・シラバスに記載する項目（和歌山大学「シラバス作成のガイドライン」より抜粋）

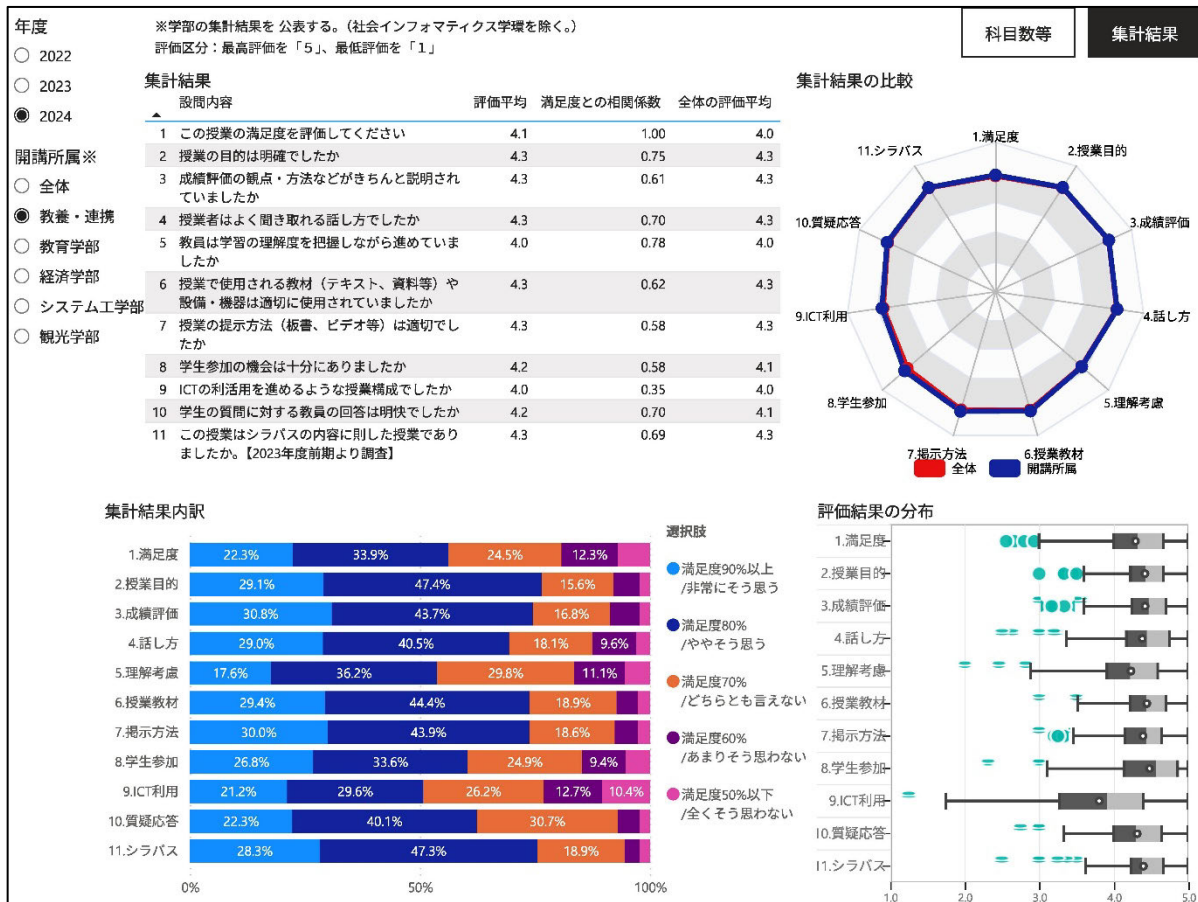
授業概要		授業計画詳細情報
基本情報	詳細情報	
(1)開講科目名	(15)授業の概要・ねらい	(29)回（日時）
(2)時間割コード	(16)到達目標	(30)主題と位置付け
(3)開講所属	(17)成績評価の方法・基準	(31)学習方法と内容
(4)チーム・学期	(18)教科書	(31)備考（担当）
(5)曜限	(19)参考書・参考文献	
(6)開講区分	(20)履修上の注意・メッセージ	
(7)単位数	(21)履修する上で必要な事項	
(8)学年	(22)履修を推奨する関連科目	
(9)主担当教員	(23)授業時間外学修についての指示	
(10)授業形態	(24)その他連絡事項	
(11)教室	(25)授業理解を深める方法	
(12)開講形態	(26)オフィスアワー	
(13)ディプロマ・ポリシー情報	(27)科目ナンバリング	
(14)担当教員情報	(28)実務経験	

・授業評価アンケート対象科目数及び回答者数について

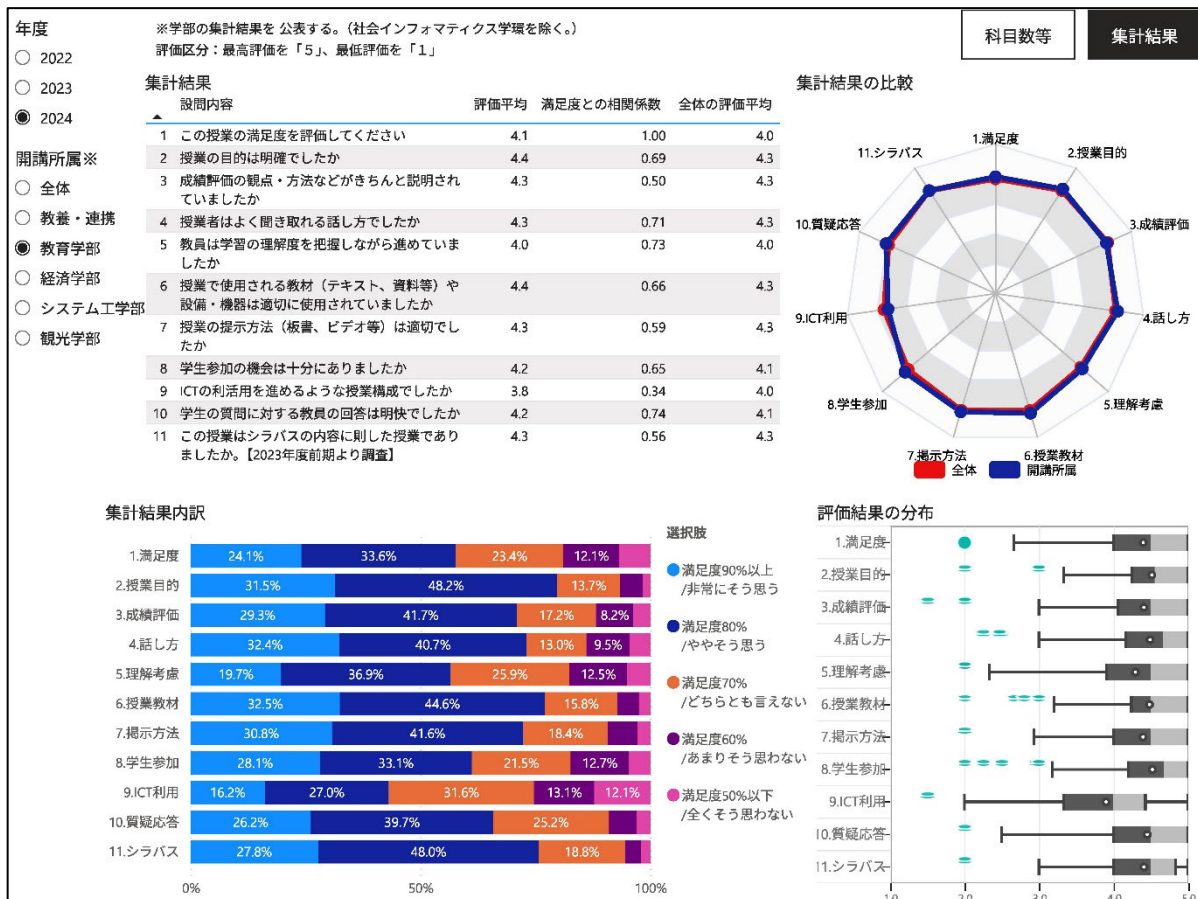
アンケート対象科目数			
開講所属	対象科目数	開講所属	対象科目数
教養・連携	350	教育学研究科	61
教育学部	440	経済学研究科	154
経済学部	355	システム工学研究科_博士前期課程	140
システム工学部	308	観光学研究科_博士前期課程	43
観光学部	178	観光学研究科_専門職課程	58
社会インフォマティクス学環	12	全体（大学院）	456
全体（学部及び学環）	1,643		

延べ回答数 学生所属別			
学生所属	延べ回答数	学生所属	延べ回答数
教育学部	3,430	教育学研究科	354
経済学部	4,742	経済学研究科	470
システム工学部	8,242	システム工学研究科_博士前期課程	422
観光学部	1,951	観光学研究科_博士前期課程	44
社会インフォマティクス学環	839	観光学研究科_専門職課程	101
全体（学部及び学環）	19,204	全体（大学院）	1,391

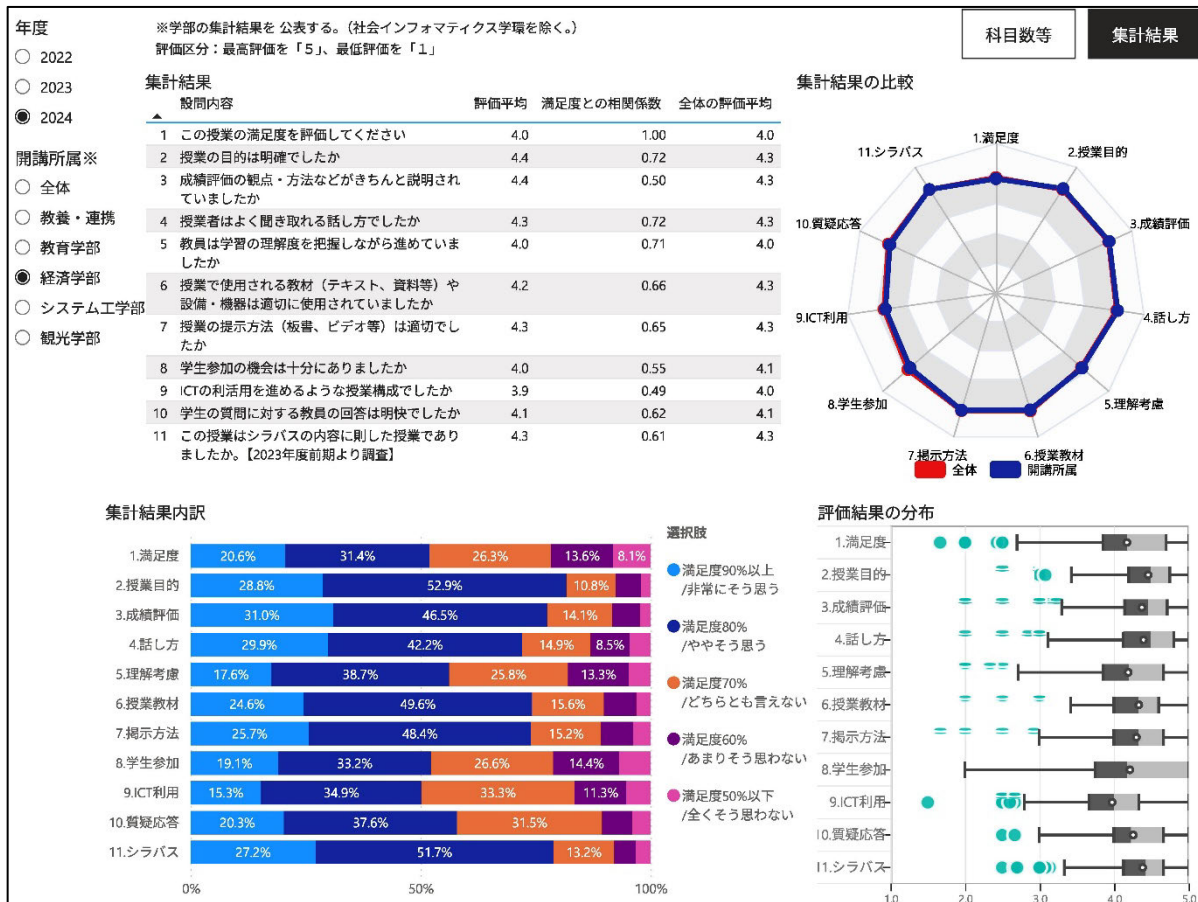
・教養教育科目・連携展開科目



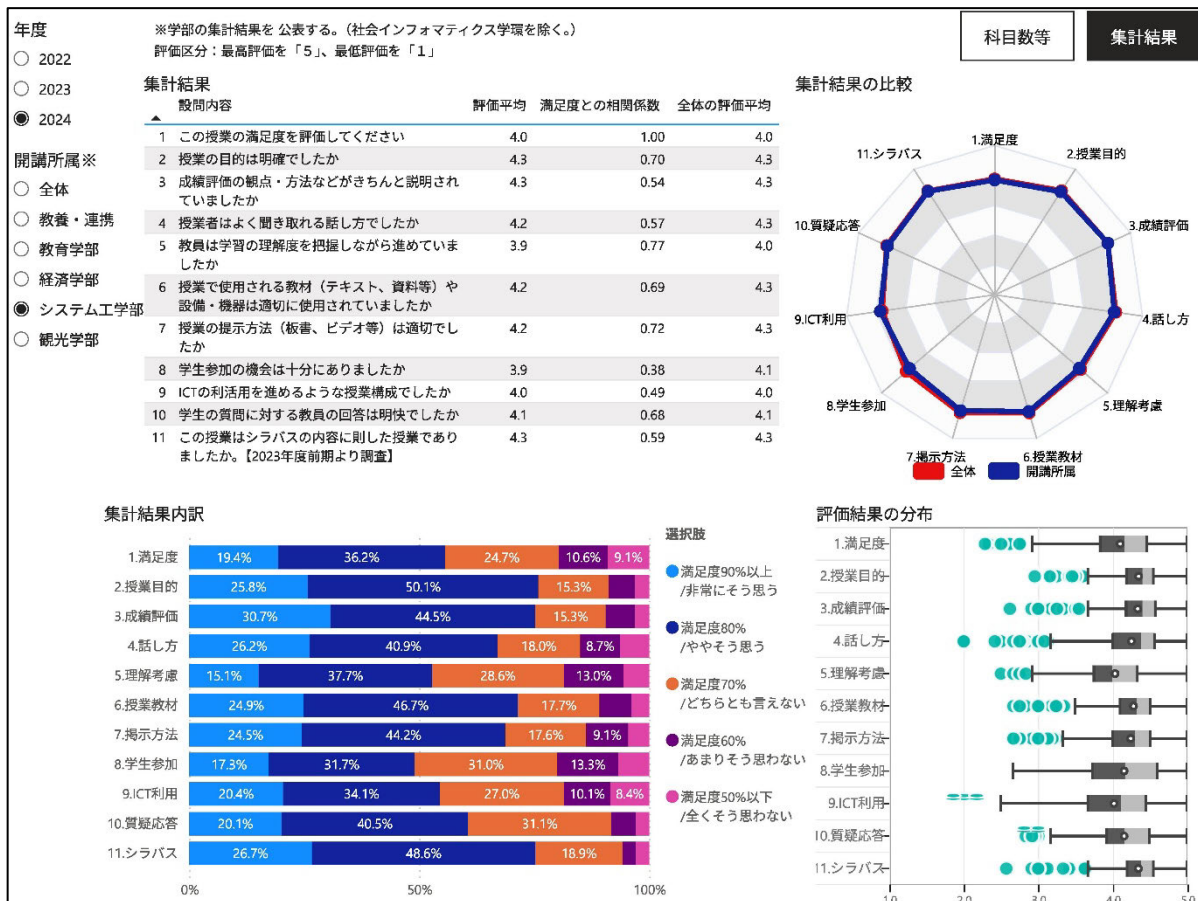
・教育学部



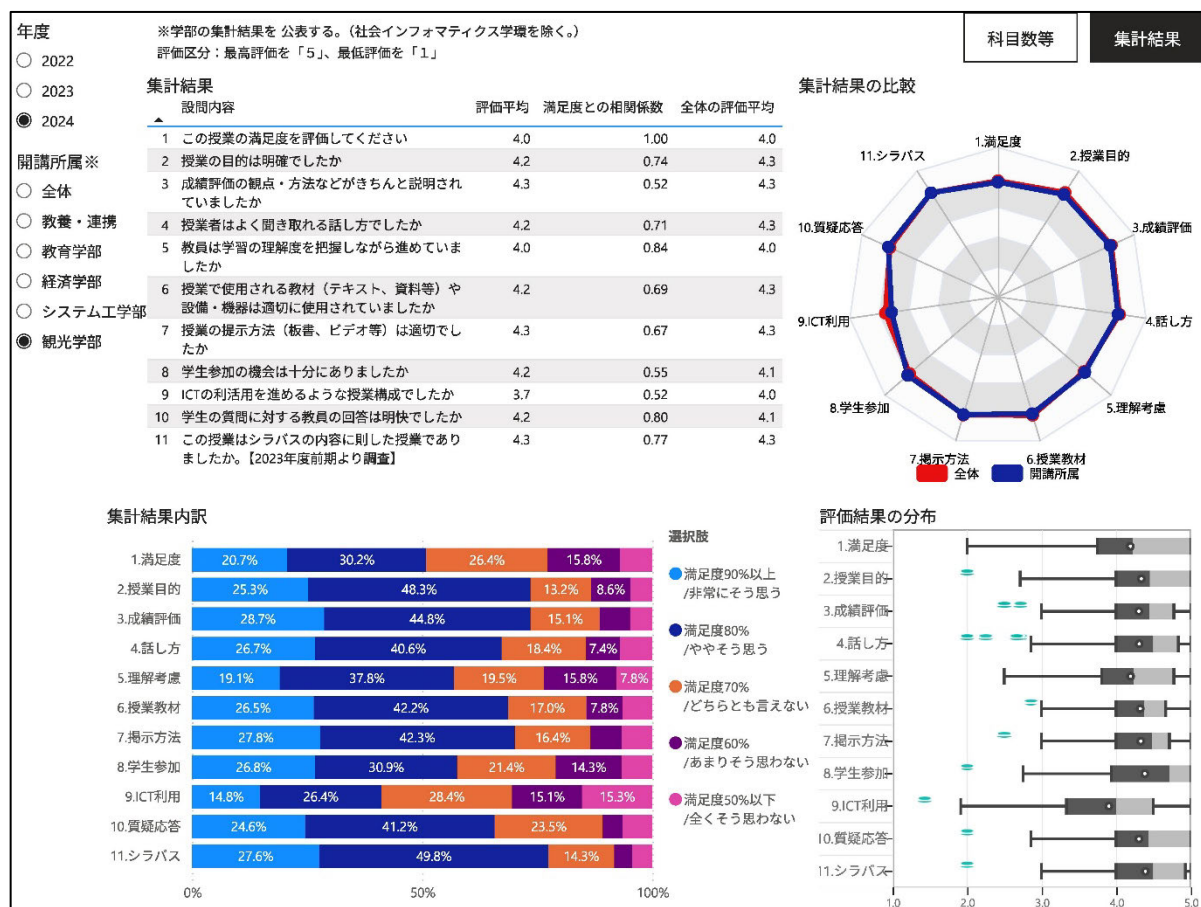
・経済学部



・システム工学部



・観光学部



※社会インフォマティクス学環については独自開講科目が少ないため、本項目は掲載していません。

【分析状況】

授業アンケートの結果は、概ね良好であるが、項目に則して分析すると、例えば全部局において「ICTの利活用」の項目の評価が授業ごとに大きく分かれていることがわかる。一方で、この項目の満足度との相関はどの部局も他項目に比べて低くなっているのも、学生も全ての授業科目に求めるものではないと考えている可能性がある。授業における ICT 利活用に関しては、全学的な推進の必要性も含めた検討が必要である。

各部局において評価が低めに出ている項目がいくつかあるが、必ずしも満足度と強い相関があるわけではない。これらの項目については、評価の低い授業科目を個別に状況確認することが有効と考えられる。

授業アンケートについては、今後の FD 研修等でその結果を利用し、授業改善をさらに進めていくとともに、回答率の向上につなげていきたい。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、到達目標の達成状況の11項目のうち、10項目が平均と同じかそれを上回っているが、平均に達していない項目として、「9. ICT の利活用を進めるような授業構成でしたか」があった。教育学部の場合、科目の特性として ICT 利用が

	必ずしもすぐわない科目もあることが要因として考えられるが、今後は積極的に ICT を活用するよう促したい。
経済学部	授業目的の明確さ、授業者の聞き取りやすさ、学修の理解度を把握した授業展開は、授業満足度との相関が高い。今年度特徴的であった学修の理解度を把握した授業展開を継続させ、学生の授業満足度を引き続き高めていきたい。また、昨年度、評価平均・授業満足度の相関が低かった学生参加の機会については、今年度は改善傾向が見られた。アクティブ・ラーニング型講義を採り入れられつつあるものと考えられ、さらなる促進に努めたい。 一方、ICT の利活用を進めるような授業構成については、評価平均および授業満足度の相関は低いことが示されている。Teams や Moodle をはじめ、対面講義の補助ツールとして活用できる ICT 媒体は既に存在するため、そうしたツールの利活用の方法を教員間で共有を図ることが必要である。
システム工学部	ほとんどの評価項目において評価は 4 以上あり、講義に関する評価は高いと考えている。他学部とも大きな違いは見られない。ただし、「教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか」と「学生参加の機会は十分にありましたか」の項目に関して、60%弱程度の学生しか「その通りである」と思っていない。 「学習の理解度の把握」に関しては、講義中に複数回の小テストを課す科目を増やすなどの工夫が必要である。 「学生参加の機会」に関しては、システム工学部における講義は、基本的な知識や技術を体系的に学ぶ講義が多いため、このような結果になったと考えられる。学生参加および ICT の利用に関しては、評価結果の分布を見るとばらつきが大きいことがわかる。授業によって、学生参加および ICT の利用がしやすい授業としにくい授業もあるため、このような結果になったと考えられる。また、学生が ICT をどう捉えているかで、回答に影響があると思われる。
観光学部	授業評価アンケートの結果は概ね全体と同様の傾向を示しているが、観光学部の傾向として、ICT 利用に関しては全学の平均値より低い結果となっている。学際的に専門科目を提供する観光学部においては、主体的学びを促すためのグループワークやフィールドワーク等を積極的に導入する科目も多く、専門的見地からの ICT 利用についてはゼミ等に委ねられている面もある。近年の観光学分野における ICT 利用の動向や社会のニーズも踏まえながら、授業における導入のあり方を見極めたい。

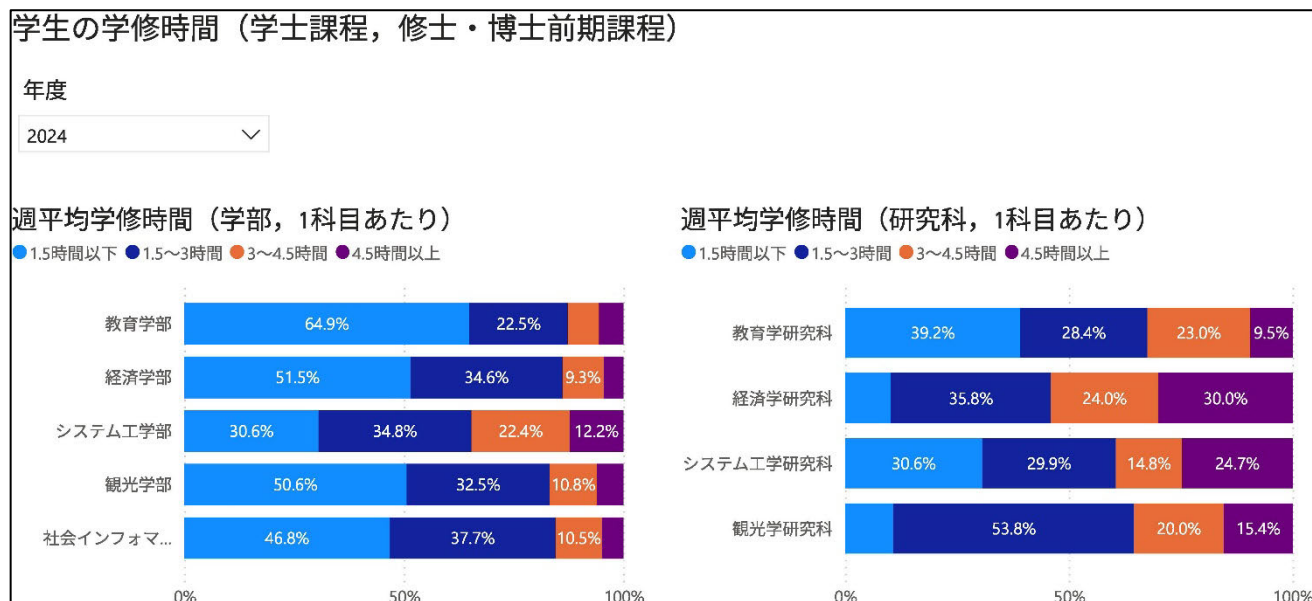
3-3 学修時間

学生が、学位プログラムが期待する水準の資質・能力を身に付けるための一般的な前提条件を満たしているかを明らかにするため、学生が授業内及び授業外で取り組む学修の平均時間を以下に示します。

▶ 学修に費やした時間の平均値及び分布について

・各学期に実施されている授業評価アンケートより

「この授業に関する通常授業期間の学修時間（授業時間を除く、1週間あたりの平均）」について



・令和6年度前期・後期授業評価アンケート「授業に関する通常授業期間の学修時間について」より集計

【分析状況】

例年すべての部局で授業時間外の学修時間が少ないことが指摘されてきているが、その傾向は変わらず、一部の部局ではより学修時間がさらに少なくなっている。学生から授業課題の負担が大きいとの声があるのも事実だが、単位制の根幹に関わることであり、授業時間外の学修量を増やすための様々な方策について早急に検討する必要がある。

1 単位時間の実質化を図るためには、予習復習を組み込んだ授業構成やカリキュラム構成を大学全体で保証する等のFDを実施していく必要がある。また、LMS（学習支援システム）の利用状況を分析することで、授業時間外学修に有効な活用方法を検討していきたい。

<各学部等からの分析結果>

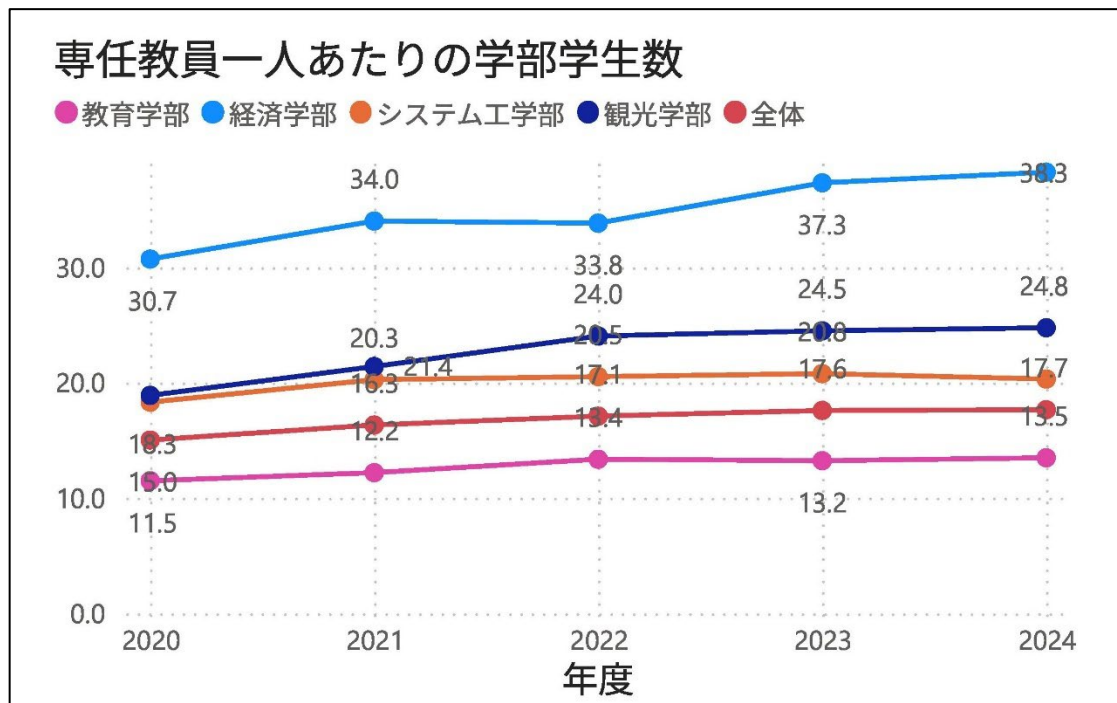
学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータでは、他学部等に比べ学修時間がやや少ないという結果になっている。複数免許を取得するため履修科目数が多くなる学生がおり、授業時間外学修時間を十分に確保できていない傾向が見られる。年度始めの学年全体ガイダンスや初回授業でのオリエンテーション等、さらにゼミ活動において大学設置基準に示されてい

	る適切な学修時間の確保に努めるよう学部教員による指導を徹底する。
経済学部	2024年度の週平均学修時間について、1.5時間以下が51.5%、1.5～3時間が34.6%、3～4.5時間が9.3%、4.5時間以上が4.5%となっている。1科目当たり週3時間（以上）の基準を満たすのが13.8%にとどまっている。ただし、昨年度と比較して、4.5時間以上の割合が若干増えており、引き続き学習支援システムの活用を促し、時間外学修の増加を図りたい。
システム工学部	1科目あたりの週平均学修時間は、他学部と比較して長い傾向が見られる。CAP制の趣旨に照らすと、平均的に毎週の学修時間を確保することが望ましい。2022年度からの変化としては、1.5時間以下が37.9%→31.3%→30.6%、1.5～3時間が37.7%→38.6%→34.8%、3～4.5時間が16.1%→21.1%→22.4%、4.5時間以上が8.3%→9.0%→12.2%と、3時間以上の学修時間が少しずつ増加しており、ガイダンス等で時間外学修を増やすように学生に対して周知した効果が出ている可能性がある。ただ、依然として、3時間以下の割合が60%以上いることから、今後も、学生に対して周知を続けていく。
観光学部	1科目あたり週平均学修時間について、1.5時間以下の学生の割合が前年度の43.1%から50.6%へと増加するなど、昨年度改善が見られた学修時間は、全体的に再び減少する結果となった。各授業における課題や時間外学修に関する指示の工夫等により、特に3時間未満の学生の学修時間の確保について意識づけを高める必要がある。
社会インフォマティクス学環	約半数は1.5時間以下と回答し、3時間以上は約15%に留まった。今後、学年の進行に伴い、学修内容はこれまで以上に複雑化することが見込まれる。学修目標を明示し、見通しを立てて、必要な学修時間を検討するよう、履修ガイダンス等を通じ、指導に努める。
教育学研究科	e-annual reportのデータより分析した結果、他研究科等より学修時間が少なめの結果となっているが、インターンシップ等の実践科目は実習先のスケジュールに沿って行われるため、授業内外での学修を明確に区別できないことが影響して学修時間が少なく見積もられた可能性が否定できない。一方、3時間に満たないものとなる回答は前年度の75.4%から67.6%と減っている。引き続き、学部における課題と同様に大学設置基準に照らし適切に指導を行う。
経済学研究科	2024年度の週平均学修時間について、1.5時間以下が10.2%、3時間以上が54.0%となっている。昨年度と比較して、3時間以上の割合は増加している。学生が講義の予復習に掛ける時間は着実に増加しており、各プログラムで期待する水準の資質・能力向上を促進していると考えられる。

システム工学研究科	1 科目あたりの週平均学修時間が 3 時間以上の割合は、他の研究科と比較して、ほぼ同程度である。年度によって若干の変動はあるが、週平均学修時間が 3 時間以上の割合は、40～50%程度であり、学部よりもやや多い。システム工学研究科は学部と異なり、学修が研究主体（修士学位論文のための研究）となることで、自身の研究の周辺の知識を身につけるための自発的な学修が増えているのではないかと考えている。今後も、ガイダンス等で時間外学修を増やすように、学生に対して周知していく。
観光学研究科	1 科目あたり週平均学修時間は、3 時間以上の回答が 25.4%となっており、昨年度の結果と比較して学修時間が減少していることがわかる。博士前期課程・専門職学位課程ともにカリキュラムの充実を図っているところではあるが、専門職学位課程を中心として社会人学生の割合が上がり、学修時間を思うように取れなくなった学生が増えていることも考えられる。今後とも、学生の意識づけを高めていく必要がある。

3-4 教員一人あたりの学生数

学生数に対して十分な教員を確保することで、密度の濃い授業や丁寧な履修指導が可能な環境であることを明らかにするため、学生数に対して十分な教員を確保していることを以下に示します。



※各年5月1日時点。学年進行中の「社会インフォマティクス学環」は非公表とする。

4. 卒業時・卒業後の情報

4-1 学位の取得状況

学生が、個々の授業科目の履修の結果として、「卒業認定・学位授与の方針」に定める資質・能力を備えていることを明らかにするため、学生が取得した学位に関する情報を以下に示します。

▶ 学位の名称と授与者の数について

・年度ごとの学位取得者数（各年3月31日時点）

<学部>

▲ 学位	2020	2021	2022	2023	2024
学士（教育学）	170	164	167	164	164
学士（経済学）	325	324	319	307	302
学士（工学）	306	327	312	296	318
学士（観光学）	120	128	105	135	129
合計	921	943	903	902	913

<修士・博士前期課程>

▲ 学位	2020	2021	2022	2023	2024
教職修士（専門職）	19	24	18	19	22
修士（経済学）	35	36	38	36	30
修士（工学）	127	120	136	130	145
修士（観光学）	12	10	11	11	6
観光地域マネジメント修士（専門職）					10
合計	193	190	203	196	213

<博士後期課程>

▲ 学位	2020	2021	2022	2023	2024
博士（工学）	6	5	2	1	2
博士（観光学）	6	6	2	1	2
合計	12	11	4	2	4

【分析状況】

概ね、入学者の数と同等の卒業生が出ているので順調と考えられる。観光学部の 2022 年度卒が少ないのは、コロナ禍の影響をもっとも大きく受けた学年の学生であり、例えば、海外留学等の機会を逃した学生が意識的に卒業を延期している事例もあることから、これらが影響していると推測される。2023 年度のシステム工学部の卒業生が、やや少ないが、定員 305 名に対する卒業率では 97%となるため、大きな問題ではないと考える。2024 年度については、システム工学部の卒業生とシステム工学研究科の修了生が増加している。その理由は 2023 年度の卒業予定であった学生が卒業したためである。また観光学研究科では、観光地域マネジメントの修了生をはじめて送りだしているため、今後の動向を注視していきたい。経済状況や新卒採用の動向を勘案しつつ学生へのキャリア支援のあり方を検討すると同時に、過年度生への指導・支援体制についても各学部・研究科への点検を依頼していく。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、入学定員に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。
経済学部	2020 年度から 2024 年度間の学位取得者の総数は 1,577 名である。この間に学位取得の見込みがある者は、主に 2017 年度から 2021 年度の入学者（各年度、326 名、324 名、323 名、304 名、305 名）で、その総数は 1,582 名である。この中には 2024 年度までに学位を取得できなかった者の人数が含まれ、学位取得者数には、2016 年度以前の入学者が含まれているが、全体としてみれば、入学者とほぼ同数の学位を授与しているとみなせる。
システム工学部	入学定員は、一般選抜(1 年生)が 305 名、第 3 年編入学が 20 名であるが、学年により入学者のばらつきがある。学位取得者数には留年生も含むため、2021 年度のように入学定員を超える場合もある。学位取得数よりも学位取得率が重要であるため、割合で見ると、入学者に対する卒業生の割合は、90～97%であり、学士の育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。特に学位取得者の少なかった 2023 年度は、入学者が他年度よりも 10 名程度少なかったことに加えて、コロナ禍により、2020 年度の入学直後から通学できなかったことも少なからず影響していると考えられる。（修業年限期間内に卒業する学生の割合等については、4-5「修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率」にて述べる。）
観光学部	従来から学位取得者数は年度ごとに増減があり、主な要因として、海外留学や長期インターンシップ、ワーキングホリデー等を理由に休学する学生の存在があげられる。2022 年度はコロナ禍等の影響による減少、2023 年度はその反動から大きく増加したと考えられるが、2024 年度は例年並みの水準と言える。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、入学者数に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。

経済学研究科	2020 年度から 2024 年度の間学位取得者の総数は 175 名である。この間に学位取得の見込みがある者は、主に 2019 年度から 2023 年度の入学者（各年度、33 名、38 名、44 名、36 名、33 名）で、その総数は 184 名である。この中には 2024 年度までに学位を取得できなかった者の人数が含まれ、学位取得者数には、2018 年度以前の入学者が含まれているが、全体としてみれば、入学者とほぼ同数の学位を授与しているとみなせる。
システム工学研究科	学位取得数よりも学位取得率が重要である。 前期：5 年間の学位取得数の変動が小さく、入学者に対して 90%前後となっており、研究者育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。一方で、毎年、数%程度が留年し、学位を取得できない学生がいるが、そのようなケースは、学生自身に問題があることも一因として考えられ、キャンパスライフ・健康支援センターと協力して対応している。 後期：5 年間の学位取得数の変動が大きく、研究者育成の取り組みにおいて、さらなる安定性や向上を目指す必要がある。社会人学生に対しては、勤務先の事情等により柔軟な対応が必要である。
観光学研究科	修士号の取得状況は、当研究科の定員状況から鑑みて、良好な状況を維持している。博士号の取得事情については、カリキュラムの充実を進め、改善方を検討している。

4-2 学生の成長実感・満足度

学生が、「卒業認定・学位授与の方針」に定められたそれぞれの資質・能力をどの程度身に付けられているか等に関する学生の主観的な評価を明らかにするため、また、「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力の育成に関してどのような評価を受けているのかを明らかにするため、卒業・修了者を対象にアンケートを実施しています。令和4年度からは全学統一のアンケート項目とし、「卒業認定・学位授与の方針」に対しての認知度・達成度・感想等についてアンケートを実施しています。令和6年度卒業・修了者へのアンケート調査結果の概要は以下のとおりです。

（令和6年度卒業・修了時アンケート）

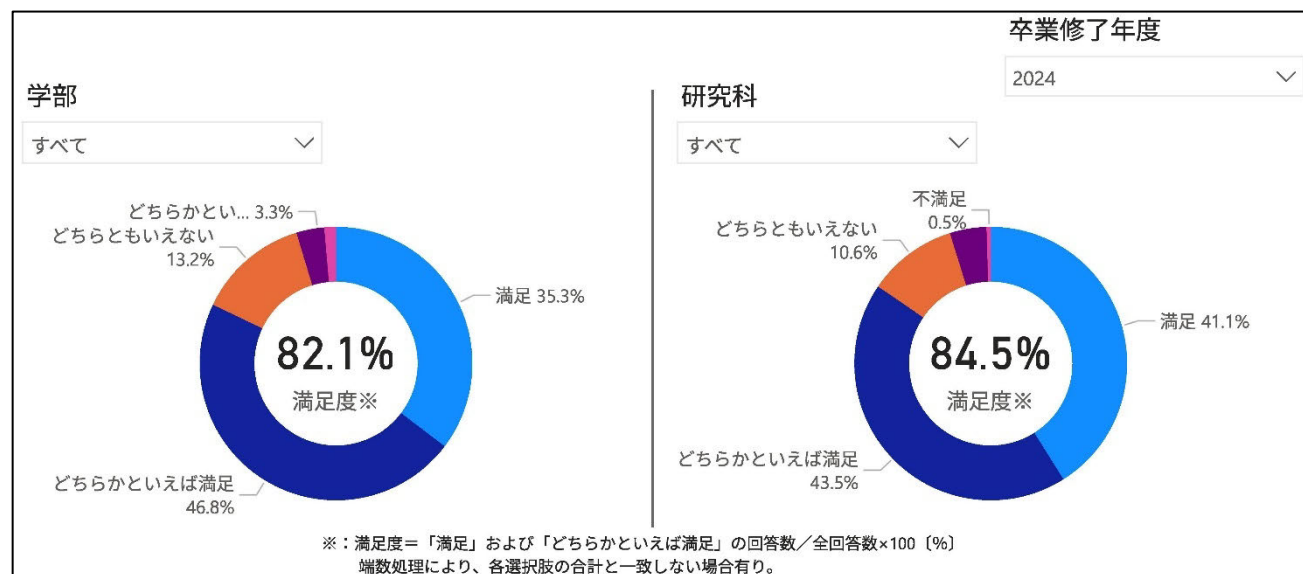
実施期間：令和6年12月～令和7年3月

実施方法：和歌山大学 Moodle のアンケート機能にて実施

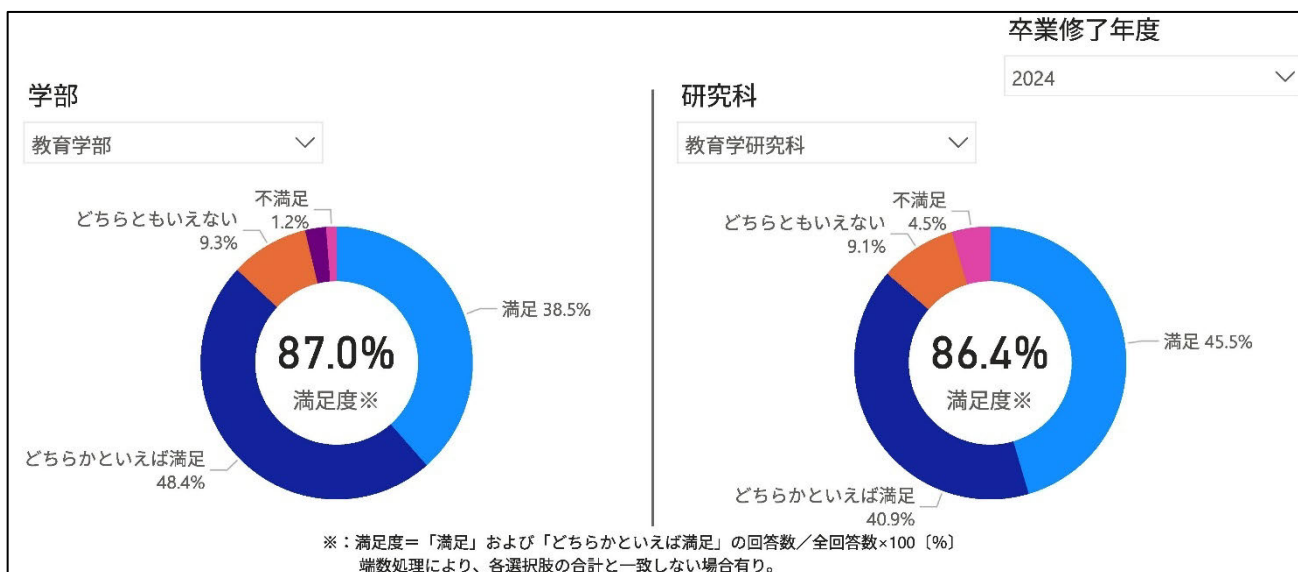
回答率：全体97.7%（卒業・修了者1,113名中1,087名回答）

教育学部	100%
経済学部	100%
システム工学部	100%
観光学部	81.7%
教育学研究科（教職開発専攻）	100%
経済学研究科	100%
システム工学研究科（博士前期課程）	100%
観光学研究科（博士前期課程）	83.3%
観光学研究科（専門職学位課程）	80.0%
システム工学研究科（博士後期課程）	100%
観光学研究科（博士後期課程）	100%

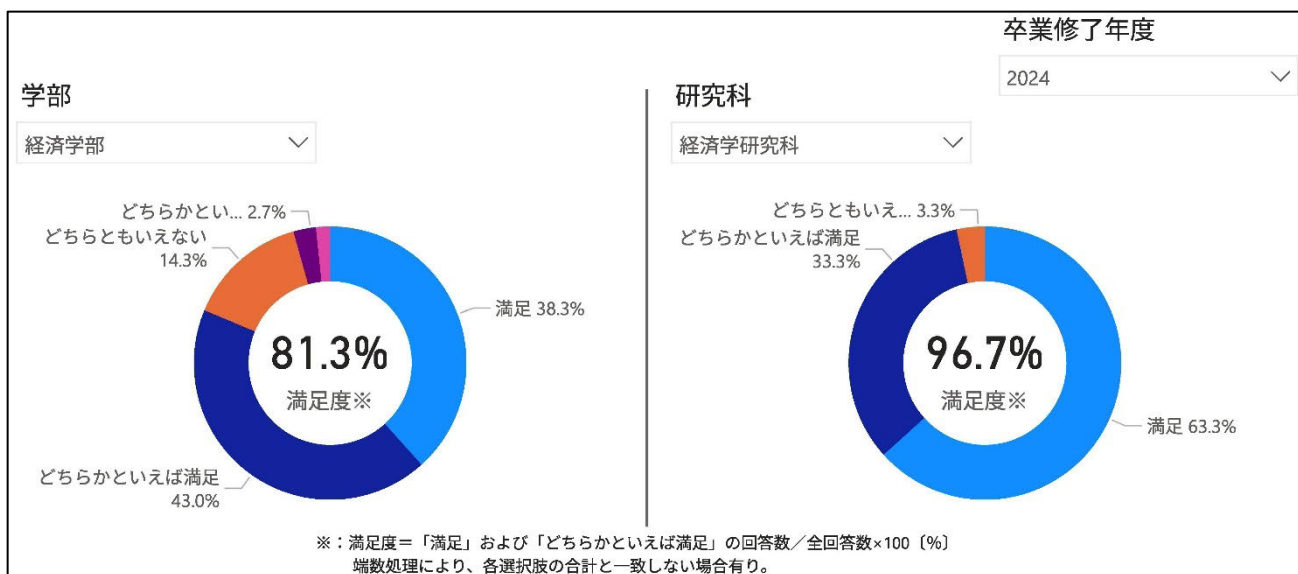
▶ 和歌山大学での教育内容全体の満足度について



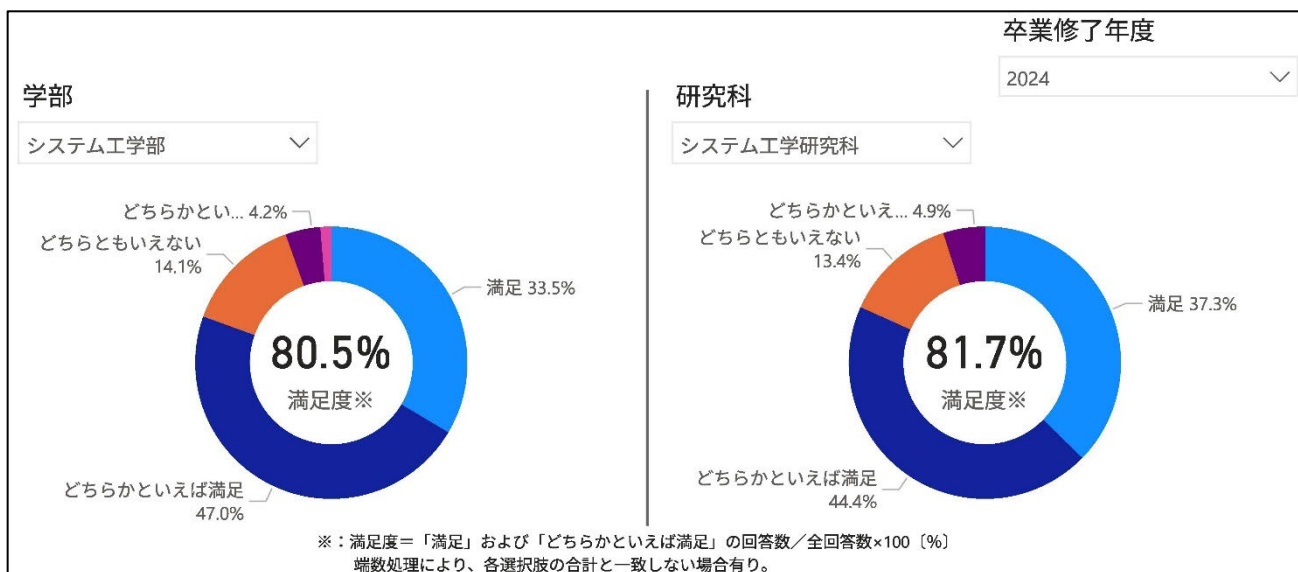
<教育学部・教育学研究科>



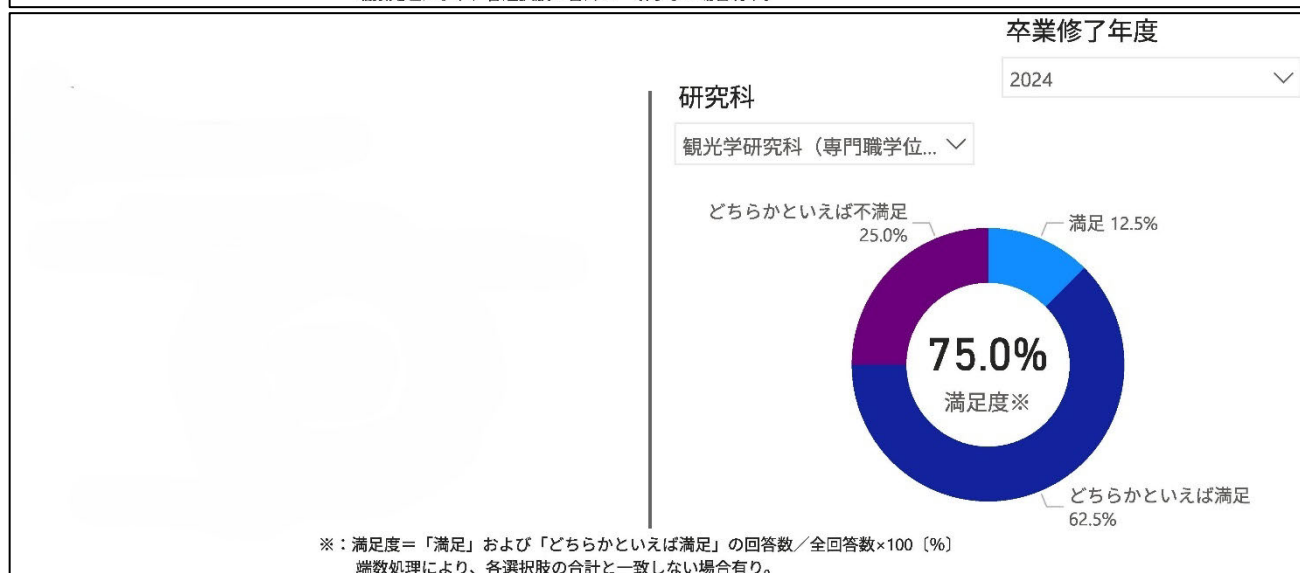
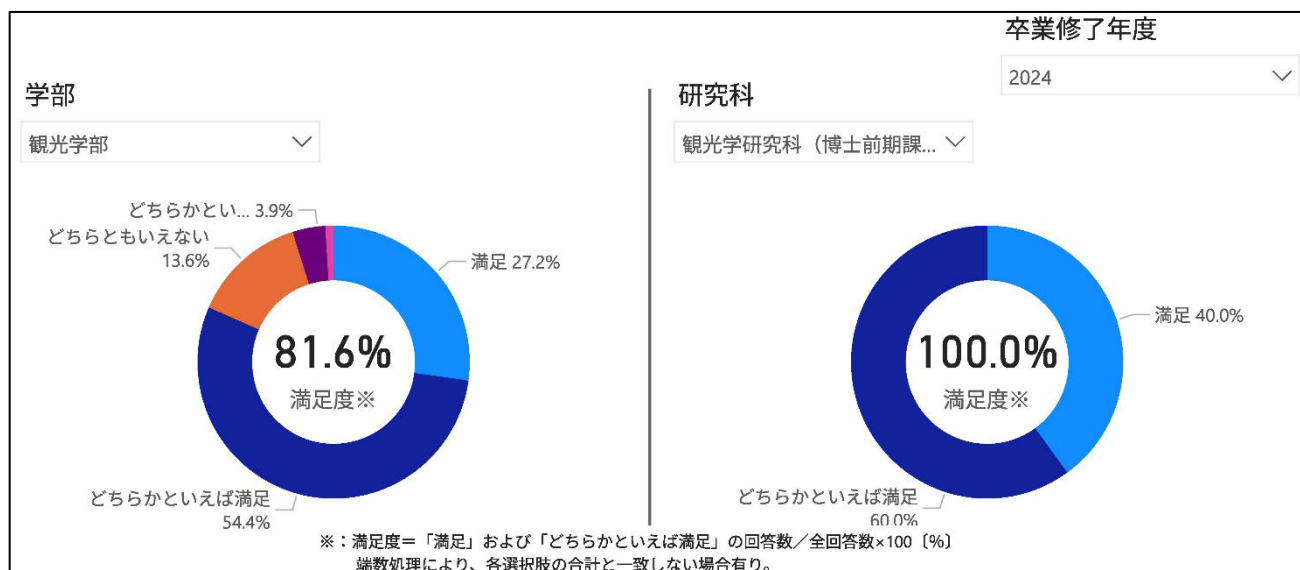
<経済学部・経済学研究科>



<システム工学部・システム工学研究科>



<観光学部・観光学研究科>



【分析状況】

和歌山大学での教育内容全体に対する満足度が、昨年度と比べ、学部では78.7%から82.1%へ、研究科では80.7%から84.5%へと上昇しており、8割以上の卒業生・修了生が教育内容について「満足」または「どちらかといえば満足」と回答している。特に経済学研究科とシステム工学部および研究科、観光学研究科は5%以上、満足度を向上させている。そのため和歌山大学において提供している教育内容については、概ね良好と言えるであろう。他方で、昨年度と比較し、教育学研究科（ただし「満足」と回答した割合は増えている）と観光学部では満足度が低下しており、その理由の分析と対応が望まれる。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	教員免許状取得が卒業要件となっているため、学生が学びに向かう意識は高く、また卒業（教員免許状取得）までのプロセスが充実していることから満足度は平均以上と高めである。引き続き、教育活動における学生の満足度をさらに高められるよう授業内容やゼミ活動の充実をはかる。

経済学部	「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数を合わせた割合が 81.3%であり、80%を下回っていた昨年度から改善傾向にある。昨年度と引き続き、「授業等の教育活動」は、充実が望ましい内容の最上位に挙げられている。授業評価アンケートに基づいて、各教員が講義内容の改善を積極的に進めているものと考えられる。
システム工学部	満足度は 80%を超えており、他学部と同程度であると考えている。一定の満足度は得られている。充実が望ましい内容として、「研究室・ゼミナールの活動」「授業等の教育活動」の回答者の割合が、他学部と比べて上位となっている。2025 年度以降は研究室配属を前倒しするなどの対応で、研究室活動を充実させているので、今後、この効果を注視する。
観光学部	教育内容への満足度は前年度の 86.8%からやや低下し 81.6%となっているものの、中期目標の 80%を上回る水準を維持している。観光学部の学生は地域や海外での学外活動への積極的な参加を希望する学生も多いことから、次年度からの新カリキュラムにおいても、演習科目の再編等により、これらのニーズに対応した学修プログラムの充実化を検討している。
教育学研究科	修了と同時に教員免許状（専修免許状）が取得できるカリキュラムとなっているため、院生が学びに向かう意識は高いことから満足度は 8 割を超える結果となっている。「満足」「どちらかといえば満足」の回答数を合わせた満足度は昨年度より低下している。ただし、「満足」の割合は増加している。引き続き、丁寧な指導を行いたい。
経済学研究科	「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数を合わせた割合が 96.7%であり、昨年度と比較して数値が上昇している。経年的に卒業時に満足を認知している学生が増えていると判断できる。ただし、「研究室・ゼミナールの活動」は、昨年度からわずかに改善傾向にあるが、充実が望ましい内容の最上位に挙げられている。具体的な課題について今後さらに検証していく必要がある。
システム工学研究科	満足度は 80%を超えており、他学部と同程度であると考えている。一定の満足度は得られている。充実が望ましい内容として、「研究室・ゼミナールの活動」「授業等の教育活動」の回答者の割合が多い。2025 年度の学部 3 年生から 6 年制を導入しているため、大学院での研究室活動が充実することが期待される。また、クラスタ再編を予定しており、教育活動の充実を目指している。
観光学研究科	博士前期課程の満足度が 100%に達している。専門職学位課程は新しいプログラムであり、社会人学生が過半を占めることから評価が厳しめになるものの 75%の満足度の結果であり、全体的に良好な状況と考えられるが、今後もプログラム内容の充実を図っていく必要がある。

4-3 学位プログラムを通じた資質・能力等の修得状況

令和6年度卒業・修了生を対象としたアンケートで、学生が学位プログラムを通じて修得した資質・能力について質問を行いました。（調査の概要は項目4-2「学生の成長実感・満足度」を参照）アンケート結果は以下のとおりです。

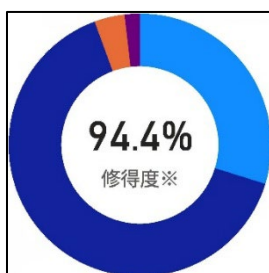
※：修得度＝「身についた」および「ある程度身についた」の回答数／全回答数×100〔％〕

端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

（学士課程）

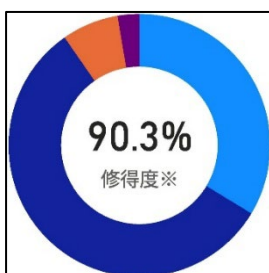
①幅広い教養や倫理性

<教育学部>



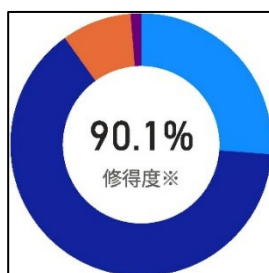
●身についた 29.8%
●ある程度身についた 64.6%
●あまり身につかなかった 3.7%
●身につかなかった 1.9%

<経済学部>



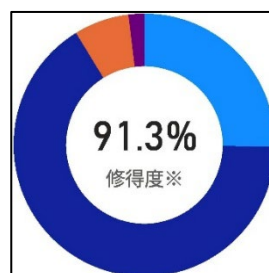
●身についた 33.7%
●ある程度身についた 56.7%
●あまり身につかなかった 7.0%
●身につかなかった 2.7%

<システム工学部>



●身についた 26.2%
●ある程度身についた 63.9%
●あまり身につかなかった 8.6%
●身につかなかった 1.3%

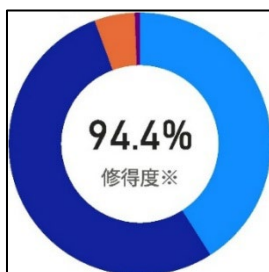
<観光学部>



●身についた 25.2%
●ある程度身についた 66.0%
●あまり身につかなかった 6.8%
●身につかなかった 1.9%

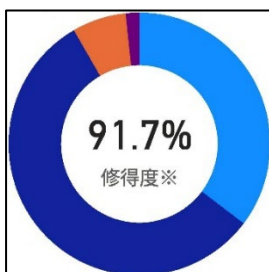
②知識や学力

<教育学部>



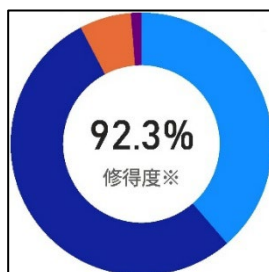
●身についた 41.0%
●ある程度身についた 53.4%
●あまり身につかなかった 5.0%
●身につかなかった 0.6%

<経済学部>



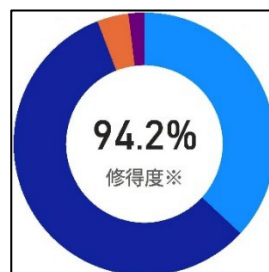
●身についた 35.3%
●ある程度身についた 56.3%
●あまり身につかなかった 6.7%
●身につかなかった 1.7%

<システム工学部>



●身についた 38.7%
●ある程度身についた 53.7%
●あまり身につかなかった 6.4%
●身につかなかった 1.3%

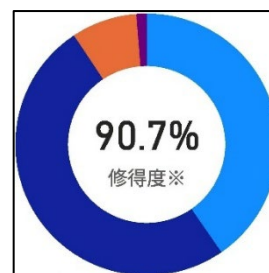
<観光学部>



●身についた 36.9%
●ある程度身についた 57.3%
●あまり身につかなかった 3.9%
●身につかなかった 1.9%

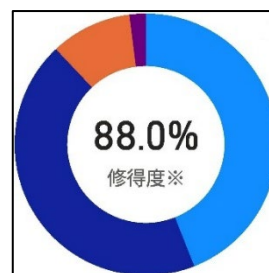
③主体性

<教育学部>



●身についた 40.4%
●ある程度身についた 50.3%
●あまり身につかなかった 8.1%
●身につかなかった 1.2%

<経済学部>



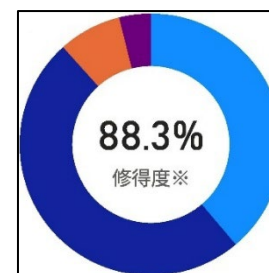
●身についた 44.0%
●ある程度身についた 44.0%
●あまり身につかなかった 10.0%
●身につかなかった 2.0%

<システム工学部>



●身についた 32.9%
●ある程度身についた 48.2%
●あまり身につかなかった 16.9%
●身につかなかった 1.9%

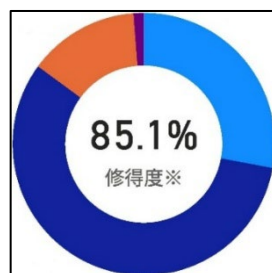
<観光学部>



●身についた 38.8%
●ある程度身についた 49.5%
●あまり身につかなかった 7.8%
●身につかなかった 3.9%

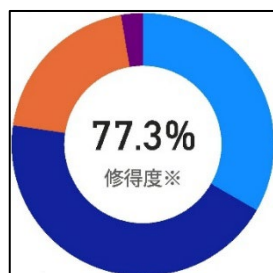
④創造力

<教育学部>



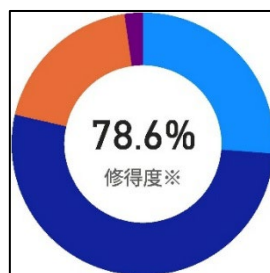
●身について 28.0%
●ある程度身について 57.1%
●あまり身につかなかった 13.7%
●身につかなかった 1.2%

<経済学部>



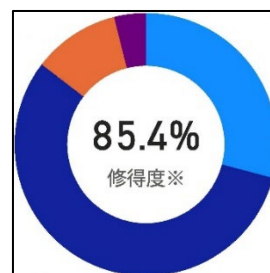
●身について 33.3%
●ある程度身について 44.0%
●あまり身につかなかった 20.0%
●身につかなかった 2.7%

<システム工学部>



●身について 26.2%
●ある程度身について 52.4%
●あまり身につかなかった 19.2%
●身につかなかった 2.2%

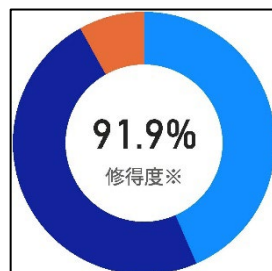
<観光学部>



●身について 29.1%
●ある程度身について 56.3%
●あまり身につかなかった 10.7%
●身につかなかった 3.9%

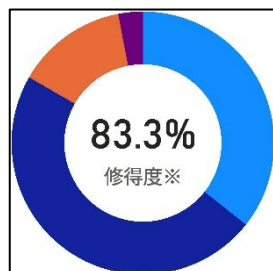
⑤実践力

<教育学部>



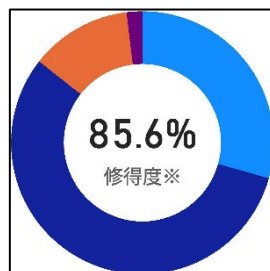
●身について 43.5%
●ある程度身について 48.4%
●あまり身につかなかった 8.1%
●身につかなかった 0.0%

<経済学部>



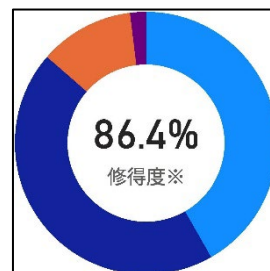
●身について 35.7%
●ある程度身について 47.7%
●あまり身につかなかった 13.7%
●身につかなかった 3.0%

<システム工学部>



●身について 29.4%
●ある程度身について 56.2%
●あまり身につかなかった 12.5%
●身につかなかった 1.9%

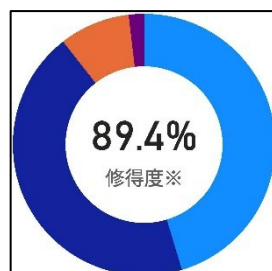
<観光学部>



●身について 41.7%
●ある程度身について 44.7%
●あまり身につかなかった 11.7%
●身につかなかった 1.9%

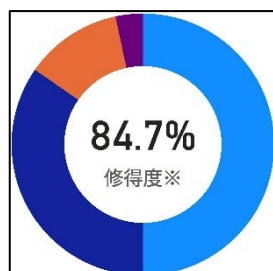
⑥コミュニケーション力

<教育学部>



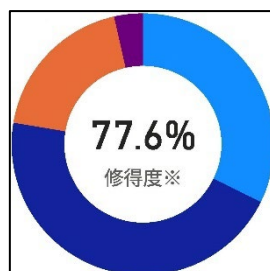
●身について 45.3%
●ある程度身について 44.1%
●あまり身につかなかった 8.7%
●身につかなかった 1.9%

<経済学部>



●身について 50.0%
●ある程度身について 34.7%
●あまり身につかなかった 12.0%
●身につかなかった 3.3%

<システム工学部>



●身について 32.3%
●ある程度身について 45.4%
●あまり身につかなかった 18.8%
●身につかなかった 3.5%

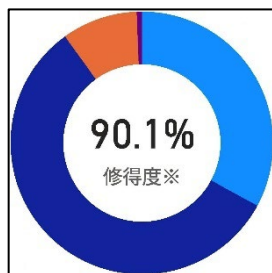
<観光学部>



●身について 48.5%
●ある程度身について 42.7%
●あまり身につかなかった 5.8%
●身につかなかった 2.9%

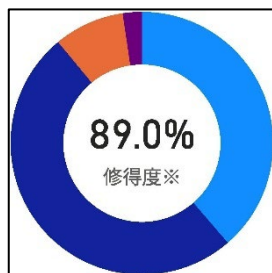
⑦多角的な思考力

<教育学部>



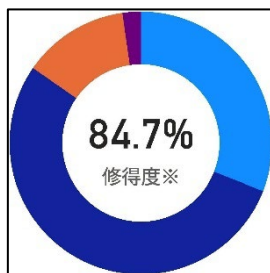
●身についた 32.9%
●ある程度身についた 57.1%
●あまり身につかなかった 9.3%
●身につかなかった 0.6%

<経済学部>



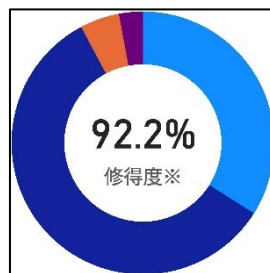
●身についた 38.7%
●ある程度身についた 50.3%
●あまり身につかなかった 8.7%
●身につかなかった 2.3%

<システム工学部>



●身についた 31.0%
●ある程度身についた 53.7%
●あまり身につかなかった 13.1%
●身につかなかった 2.2%

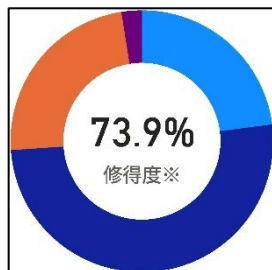
<観光学部>



●身についた 34.0%
●ある程度身についた 58.3%
●あまり身につかなかった 4.9%
●身につかなかった 2.9%

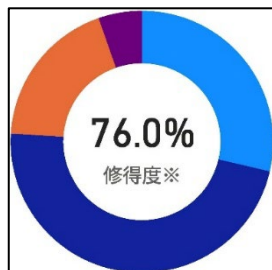
⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

<教育学部>



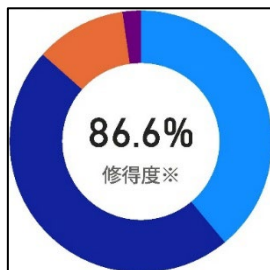
●身についた 23.0%
●ある程度身についた 50.9%
●あまり身につかなかった 23.6%
●身につかなかった 2.5%

<経済学部>



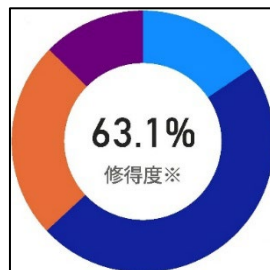
●身についた 28.7%
●ある程度身についた 47.3%
●あまり身につかなかった 18.7%
●身につかなかった 5.3%

<システム工学部>



●身についた 39.0%
●ある程度身についた 47.6%
●あまり身につかなかった 11.2%
●身につかなかった 2.2%

<観光学部>



●身についた 15.5%
●ある程度身についた 47.6%
●あまり身につかなかった 24.3%
●身につかなかった 12.6%

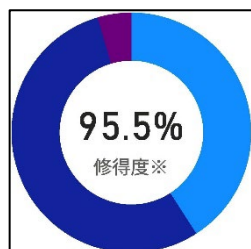
(修士・博士課程)

①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

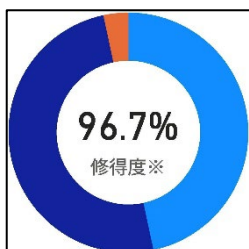
<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

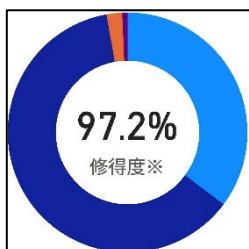
(専門職学位課程)



●身についた 40.9%
●ある程度身についた 54.5%
●あまり身につかなかった 0.0%
●身につかなかった 4.5%



●身についた 46.7%
●ある程度身についた 50.0%
●あまり身につかなかった 3.3%
●身につかなかった 0.0%



●身についた 35.2%
●ある程度身についた 62.0%
●あまり身につかなかった 2.1%
●身につかなかった 0.7%



●身についた 60.0%
●ある程度身についた 40.0%
●あまり身につかなかった 0.0%
●身につかなかった 0.0%



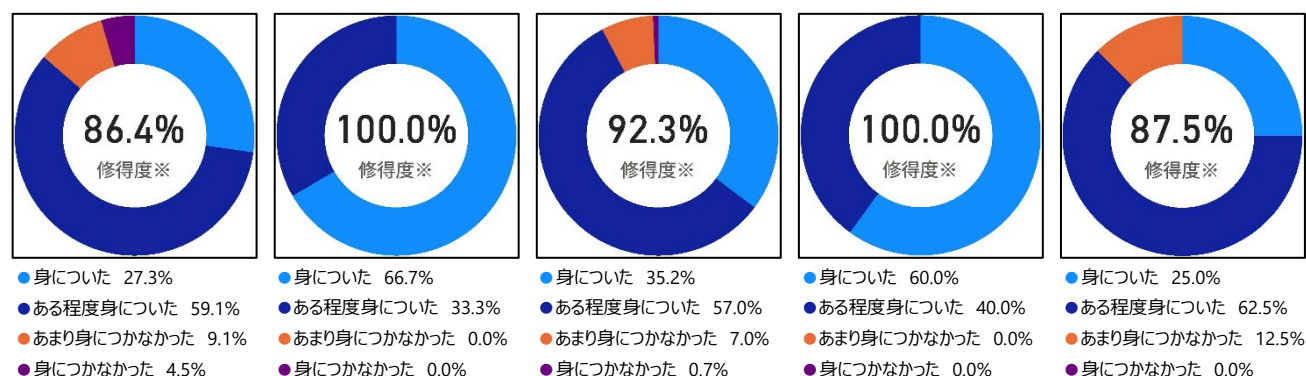
●身についた 25.0%
●ある程度身についた 75.0%
●あまり身につかなかった 0.0%
●身につかなかった 0.0%

②高い人権意識や倫理観

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)

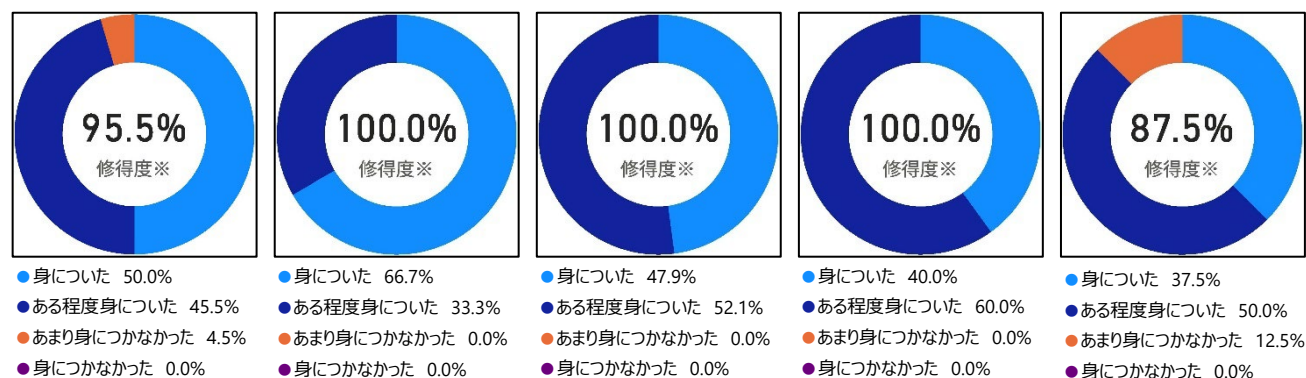


③課題解決能力

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)

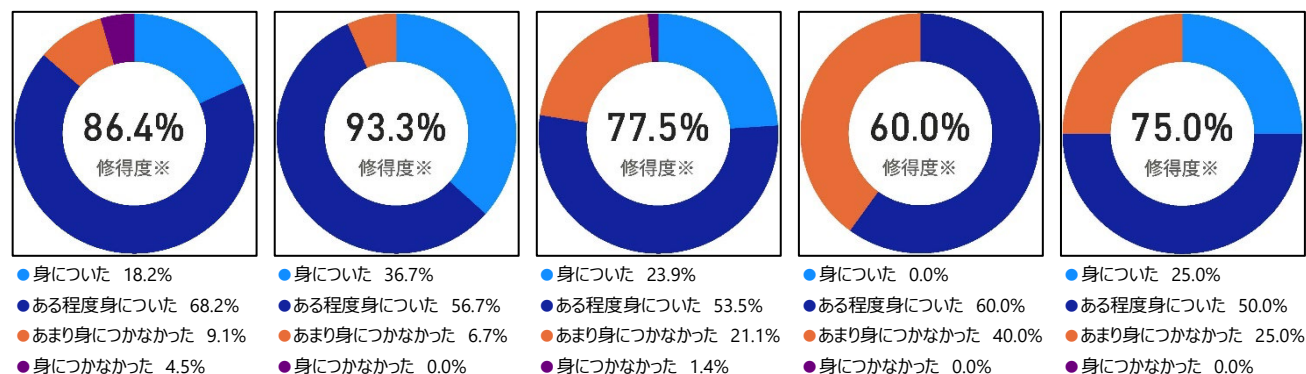


④リーダーシップを発揮する力

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)

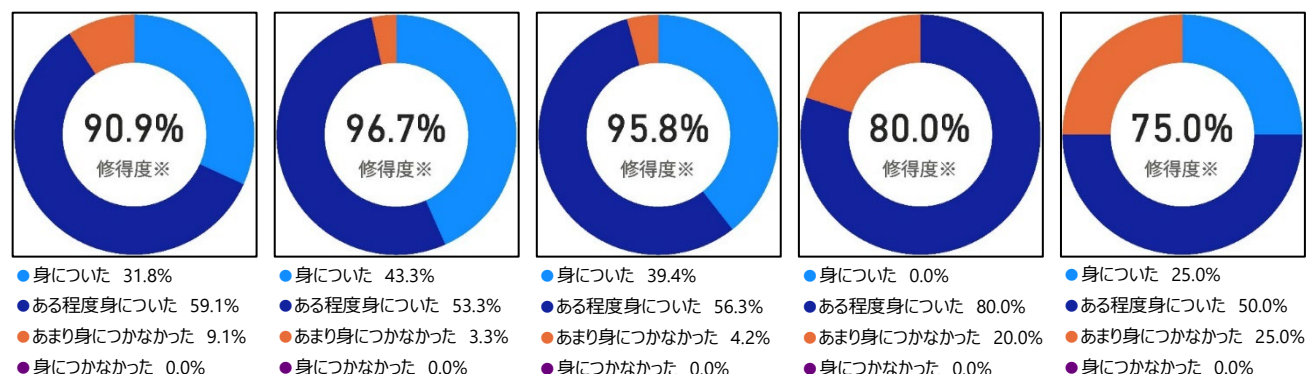


⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)

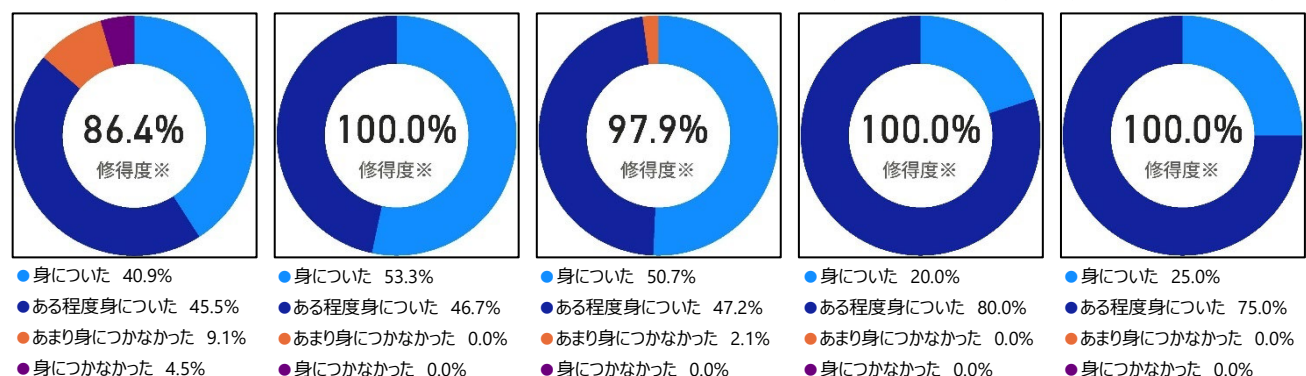


⑥分析し、改善・応用する力

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)

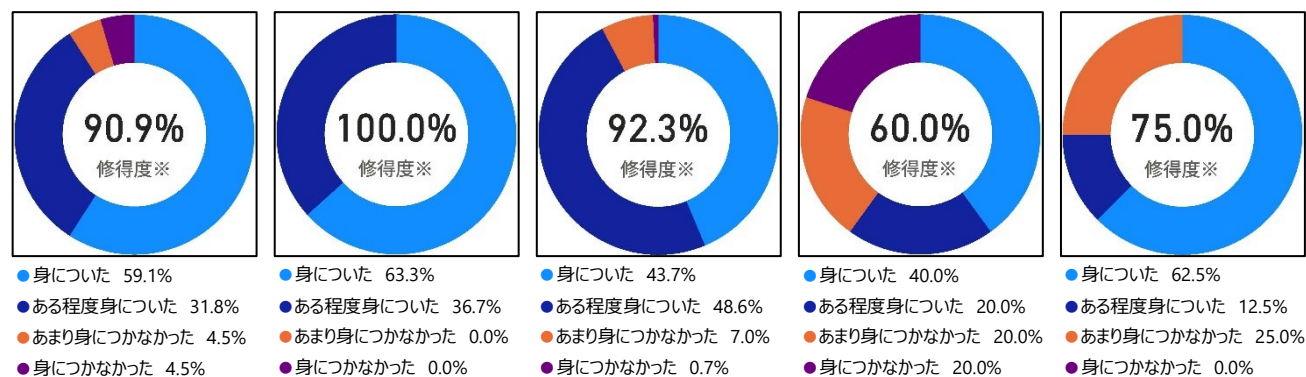


⑦コミュニケーション力

<教育学研究科> <経済学研究科> <システム工学研究科> <観光学研究科>

(博士前期課程)

(専門職学位課程)



※博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

昨年度と比較し、多くの項目で資質・能力を身につけたと回答する学生の割合が微増している。特に、経済学部「主体性」、教育学部「創造力」、システム工学部「実践力」「コミュニケーション力」「多角的な思考力」、観光学部「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」、経済学研究科「リーダーシップを発揮する力」、システム工学研究科「コミュニケーション力」は5%以上、それらの資質・能力を身につけたとの回答が向上している。他方で、大学全体としては「創造力」と「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」のさらなる向上が課題となっている。また教育学研究科「高い人権意識や倫理観」「課題解決能力」「コミュニケーション力」の育成に課題がみられ、観光学研究科については、他の研究科と比べると多くの項目で回答結果が低く、特に「リーダーシップを発揮する力」「平易かつ論理的に表現し、発信する力」「コミュニケーション力」の育成に課題がみられる。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、資質・能力等の修得状況の8つの項目で、おおむね他より良好な結果となっている。しかし項目8「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」においては他の項目に比べて低い数字である。このことは3-2「各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）」の設問9、「ICT 利用」の集計結果で「どちらともいえない」を含む肯定的ではない回答の割合が半数を上回っていることと関係していることが推測される。この原因の一つとしては、教育学部の開設科目で実習・実技等の授業の割合が多いことが考えられるが、引き続き、ICT の利活用を進めるよう授業内容の工夫を促し、学生の資質・能力等の向上を図っていく。
経済学部	「創造力」と「ICT 機器の活用能力と情報リテラシー」以外の資質・能力については、昨年度同様に8割を超える卒業生が修得したと自己評価している。ただし、両資質・能力とも昨年度の数値より改善している。8割を超えるように、「創造力」と「ICT 機器の活用能力と情報リテラシー」に関する資質・能力のレベルアップを図っていく。
システム工学部	資質・能力の習得状況において、創造力（78.6%）が他学部と比べてやや低く、これらの資質・能力を養うような工夫が必要であると考えられる。特に、コミュニケーション力（77.6%）に関しては、他学部と比べてもやや差があると考えられる。基礎的な専門知識を修得するための座学を中心とした講義が多いことが、資質・能力等の修得状況が低いことの一因であると考えられる。
観光学部	概ね前年度と同水準となっており、一部項目については上昇するなど、全体として高い水準で身につけたものと考えられる。実践型の教育プログラムや学外活動に積極的に参加する学生も多いことから、「主体性」「創造力」「実践力」「コミュニケーション力」「多角的な思考力」等の高水準の回答結果に結びついていると考えられる。一方で、「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」は低めの水準となっているが、教育内容の見直しを引き続き進めており、今後の動向を注視する必要がある。

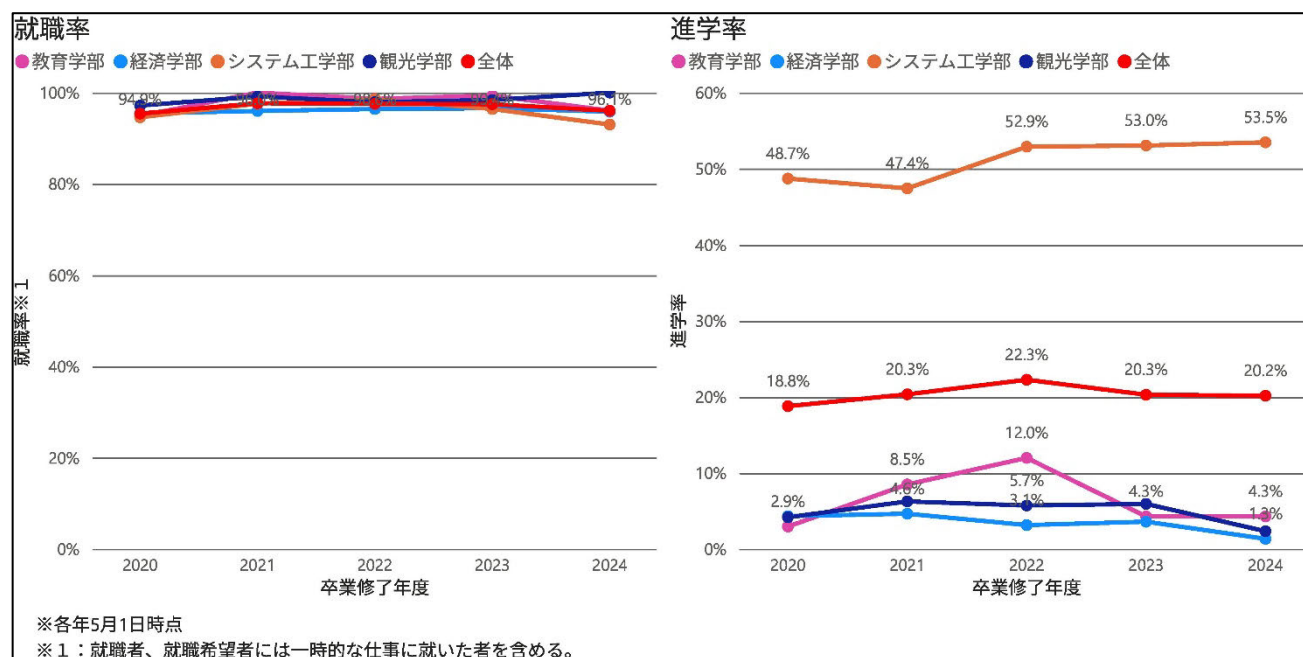
教育学研究科	e-annual report のデータを分析したところ、大学全体で高い数値の項目が多く、その項目での数値の細かな差は実質的なものではないだろうが、特に他研究科等と比べて低めの項目として目につくのは項目 2「高い人権意識や倫理観」、項目 3「課題解決能力」、項目 6「分析し、改善・応用する力」である。ただし、母数が小さいため、こういった割合の上下が見えやすいところがある。研究として取り上げる、学校現場での課題の難しさが反映しているのかもしれないが、これらの力の養成のために丁寧に指導を行う。
経済学研究科	全ての資質・能力について 8 割を超える卒業生が修得したと自己評価している。昨年度、8 割を下回った「リーダーシップを発揮する力」の割合が大幅に上昇した。これは、主体的な課題解決と他者との協働を重視する実践演習科目の効果が反映されている可能性がある。
システム工学研究科	課題解決能力が 100%と高く、これは「システム工学研究」の効果が反映されている可能性がある。リーダーシップ力については 77.5%と低水準であった。2023 年度も 70.1%と低く、改善のためには、リーダーシップを発揮する立場に立つ経験ができるような機会を作る必要があると考えられる。一方で、コミュニケーション力は学部との比較で 92.3%と高く、これは「システム工学講究」の効果が反映されている可能性がある。
観光学研究科	博士前期課程では、高度な専門知識や人権・倫理観、課題解決力、分析力など学術的技能の取得において 100%の結果が出ている。一方、リーダーシップや表現力の部分においては、国費留学生を含む留学生の多い環境であり、日本人学生や中国人学生においても英語での論文執筆・発表にチャレンジする学生が出てきており、高めの目標設定から評価が厳しめに出たものと考えられる。 専門職学位課程でも、高度な専門知識や分析力において 100%の修得度であり、その他の項目においても、社会人学生の割合の高さから評価が厳しめに出ている傾向があるものと考えられる。 両課程においては、今後とも、カリキュラムや学生指導の改善を、継続的に検討していく必要がある。

4-4 進路の決定状況等の卒業後の状況（就職率や進学率等）

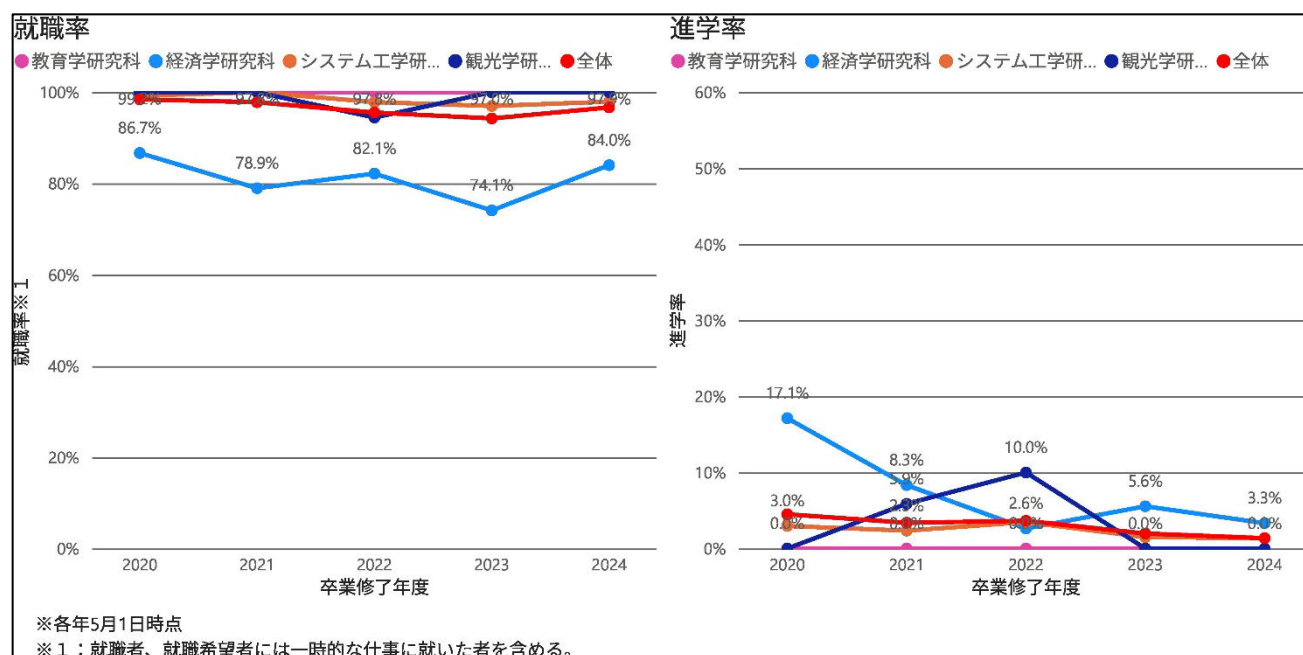
大学が、就職や進学等を希望する学生に対して進路を保証できているかを明らかにするため、卒業生・修了生の就職率及び進学率を以下に示します。

▶ 卒業生・修了生の進路状況について

<学部>



<研究科>



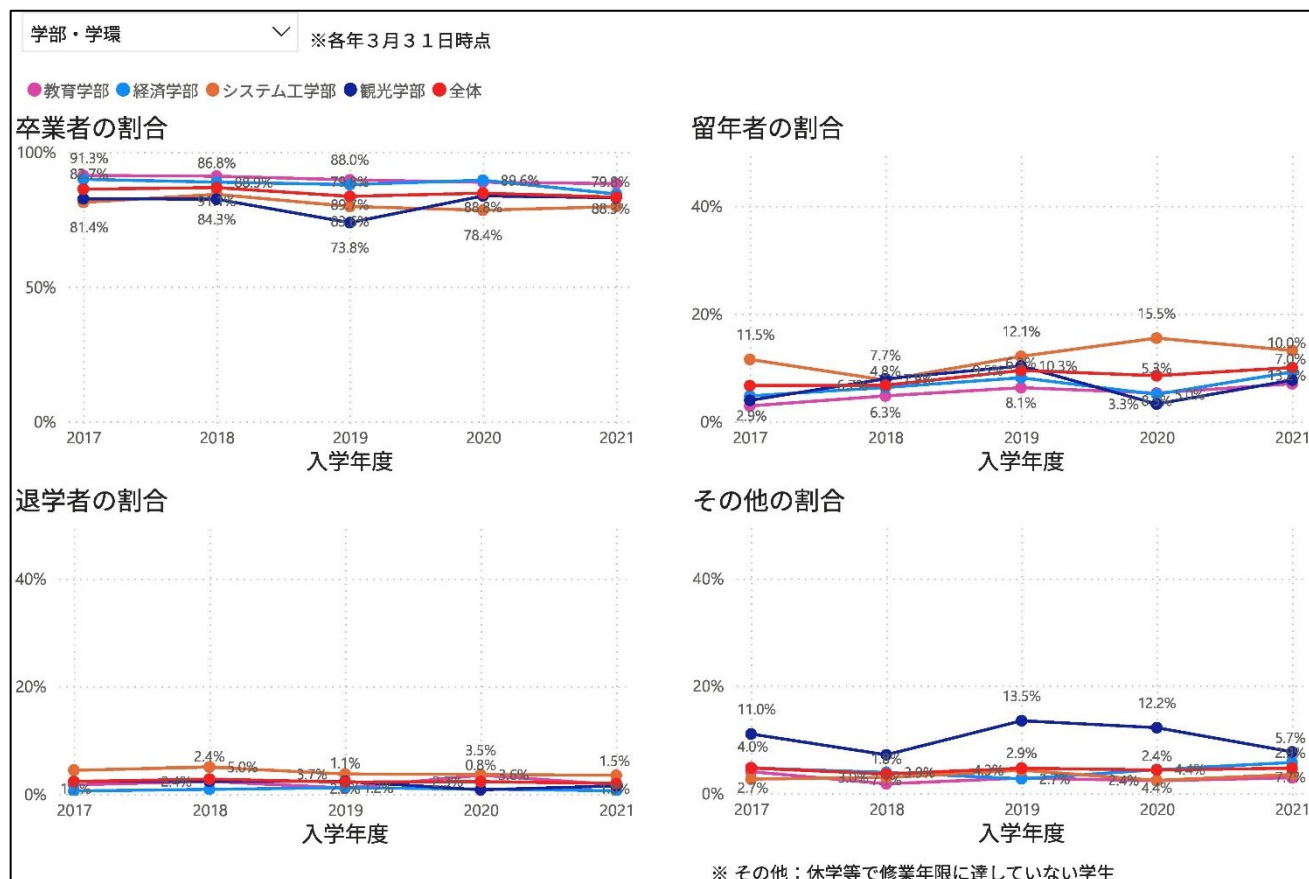
4-5 修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率

大学が、修業年限期間内において学生の資質・能力を計画的に伸ばし、学位の取得まで到達させていることを明らかにするため、修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率を以下に示します。

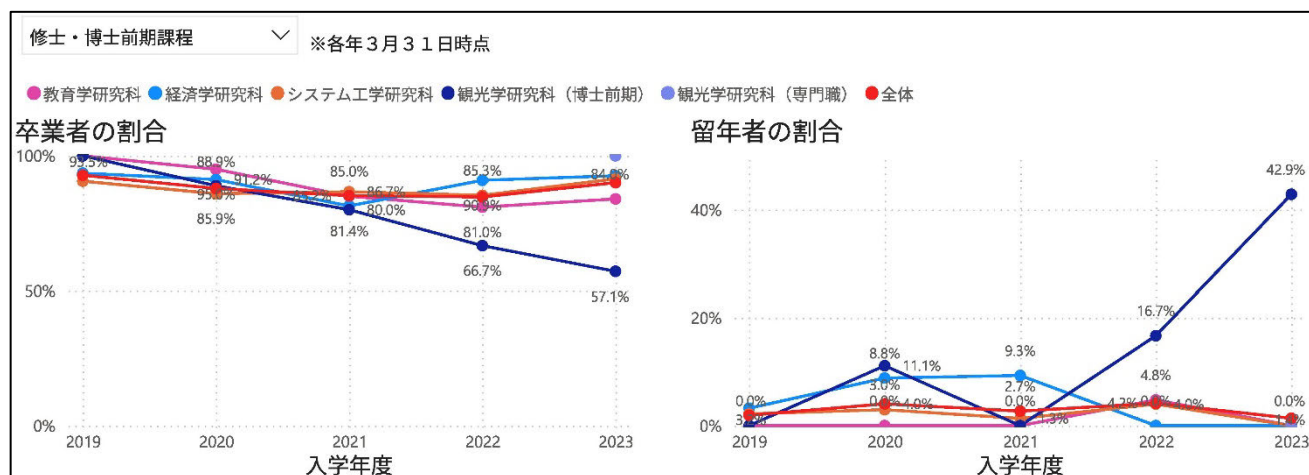
▶ 修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率

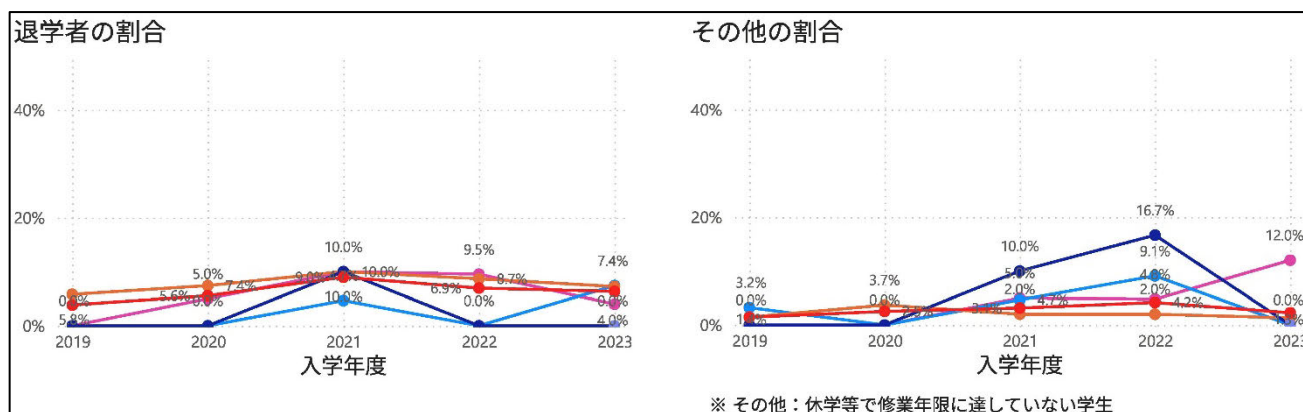
※3年次編入者を含む。長期履修・短期履修・転学部は含まない。

<学部>

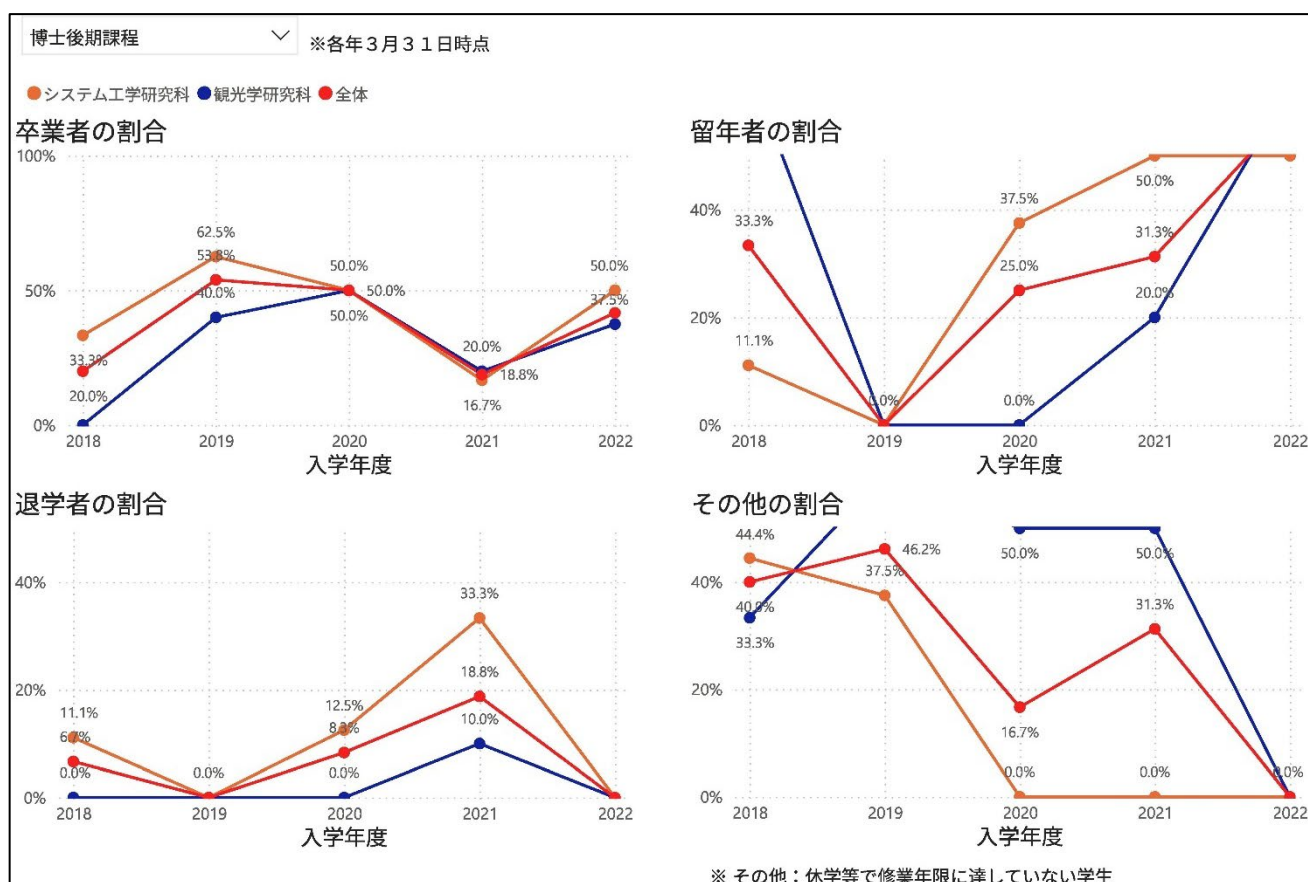


<修士・博士前期課程>





< 博士後期課程 >



【分析状況】

学部生は、2023 年度卒業生に比較して、2024 年度卒業生の就職率は、教育学部、経済学部、システム工学部で数%ずつ減少している。また、2021 年度入学者に比較して、2022 年度入学者の留年率は教育学部、経済学部、観光学部で数%ずつ上昇している。上昇していないシステム工学部でも留年率は他学部よりも高い。学部4年間を見通した履修計画への指導、卒業後のキャリア選択について、ガイダンスやゼミ等での指導・支援の充実が、各学部とも必要である。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	卒業者については、教員になる者については数が維持され、教員以外の道に進む者の数が減る傾向にあることがわかっており、また、e-annual report のデータにあるように、就職率も大きな年変動はない。留年者、退学者について特に多いわけではないが、これは教師以外の進路希望者であることが多い。目的養成の学部でありやむをえないところもあるが、他の業種を進路とする学生に対しては科目の履修を通して身に付けた力を教員以外の業種であっても生かせる等、キャリアガイダンスの中で適切に指導を行う。
経済学部	卒業者の割合は 80%以上、留年者の割合は 4～9%、退学者の割合は 0.6～1.2%の範囲に留まり、特に目立った傾向はない。「その他の割合」が増加傾向にあり、海外留学や就職活動を理由とした学生が増えつつあると判断できる。また、就職率に関しては、2020 年度 97.7%、2021 年度 97.9%、2022 年度 99.0%、2023 年度 98.2%、2024 年度 97.2%とほぼ横ばいで、高水準を保っており、引き続き推移をみていく。
システム工学部	就職率については、この 5 年間で 90%前後であり、他大学(全国)の工学系学部の就職率よりも 1～4%程度高く、学部での教育が企業等により一定の評価を受けている結果であると考えている。一方、就職先が決まらずに卒業した学生に対しては、キャリア支援室にて相談窓口を設けており、在校生と同様にキャリアカウンセラーが就職活動を支援している。 卒業者の割合は他学部と比べてやや低い、全国の工学系大学の卒業率はおおよそ 80%であるため、全国平均と同程度と思われる。退学者の割合は他学部と比べてやや高い。全国の工学系大学の退学者の割合はおおよそ 2%である。5 年間の平均で見ると 4%程度であるので、全国平均よりもやや高い傾向と思われる。本学部は後期入試で入学する学生が他大学よりも多く、進路を再考する学生も一定数いるための傾向であると考えている。 メンタルに問題を抱えている学生が一定数いるため、キャンパスライフ・健康支援センターと協力して対応している。
観光学部	いずれの年も高い就職率を維持している。また、留年者の割合、退学者の割合とも特に目立った傾向は見られない。また、海外留学等を理由に休学する学生の存在が影響し、他学部と比較して「その他の割合」が多い傾向が見られた。2021 年度入学者では減少が見られ、他学部の水準に近づいている。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、留年者や退学者が他と比べて多いわけではないが、母数(入学者数)が小さいため、一人でも留年・退学すると割合が上昇する状況となる。今後も、少人数であることを活かし、履修等への丁寧な指導やサポートを引き続き行いたい。

経済学研究科	卒業者の割合は80%以上、留年者の割合は10%未満、退学者の割合は10%未満であり、概ね他研究科と同水準であるが、留年者の割合が他研究科に比べて多いため、学位取得までの丁寧なサポートが課題である。また、就職率に関しては、年度によって変動がある。この理由は、例年、留学生が半数以上、社会人学生も一定数在籍しており、多様な進路を辿る。特に留学生は、母国帰国者が多数いるためである。さらに、修士論文の執筆を終えてから本格的に就職活動をスタートするため、修了時に進路決定していない学生は一定数いるが、修了後半年以内に決定するケースが多いことも挙げられる。
システム工学研究科	前期課程： 就職率は97～99%であり、他大学(全国)の工学系研究科の就職率(約93%)よりも高い。研究科での教育が企業等により一定の評価を受けている結果であると考えている。 5年間の平均修了率が9割程度である。学部にと比べると増加している。5年間の平均留年率が2%程度である。学部にと比べると大幅に減少している。これらの傾向は、大学院2年間の研究指導により、学生の資質・能力を伸ばし、学位の取得まで到達できていると考えられる。 後期課程： 5年間の平均修了率が4割程度である。これは、厳格な博士号審査が行われていることが一つの要因として考えられるが、今後、修業年限期間内に学位を取得できるような指導を行うように努める必要がある。また、5年間の退学者の割合が0～3割程度と大きく変動している。後期課程の人数が少ないため、各個人の動向が反映された結果と考えている。
観光学研究科	研究科の就職率は良好な状況にあるものの、進学率は低い水準に留まっており、改善が求められる。2023年度博士前期課程入学者の留年者の割合が高くなっているが、もともとの定員が少ないため、少数の学生の動向が反映されたものと考えられる。博士後期課程では、いずれの数値でも大きな差異はない。

▶ 学位取得に要した年数ごとの修了者の割合について

※各年度末日（3月31日）時点

修了年度								
2024								
大学院課程	標準修業年限	1年	2年	3年	4年	5年	5年以上	
教育学研究科（専門職）	2年		95.5%	4.5%				
経済学研究科（修士）	2年		93.3%	6.7%				
システム工学研究科（博士前期）	2年		95.9%	3.4%	0.7%			
観光学研究科（博士前期）	2年		66.7%	33.3%				
観光学研究科（専門職）	2年		100.0%					
システム工学研究科（博士後期）	3年				50.0%	50.0%		
観光学研究科（博士後期）	3年		50.0%	50.0%				

※休学および長期履修・短期履修を含む。

【分析状況】

ほとんどの研究科では、標準修業年限で修了している。その一方で、観光学研究科の前期博士課程が33%とやや高く、課題があることが読み取れる。院生へのきめ細やかな指導や支援の充実が求められる。

<各学部等からの分析結果>

研究科	分析コメント
教育学研究科	修了生 22 名中、長期履修制度（3 年）が 1 名であった。e-annual report のデータはこの人数の割合をおおむね反映したものになっており、当初の予定通りの年限での修了となっている例が多いことがわかる。大学院で学修や実習に困難がある院生も少なくないが、教員会議でひとりひとりへの丁寧な対応を頻繁に検討しており、その成果がでていないのではないかとと思われる。
経済学研究科	標準修業年限である 2 年で学位を取得している学生は 9 割を超えており、ほとんどの学生が標準的な年限で修了している。一方、修了に 3 年を要している学生も存在しており、具体的に何に課題があるのかを今後検証していく必要がある。

システム工学研究科	前期課程： ほとんどの学生が標準修業年限で修了していると考えている。4%の学生が標準修業年限を超えているが、該当数は数名であり、個別の学生の資質に寄っているものと考えている。個々の事情に応じた、きめ細かな指導を今後も続けていく。 後期課程： 2024 年度は、標準修業年限で修了した学生がいらない。人数が少ないため、個別の学生の資質によるところが大きいと考えられるが、4-5 でも述べた通り、修業年限期間内に学位を取得できるような指導を行うように努める必要がある。
観光学研究科	博士前期課程については、修了に3年を要した学生の割合が高く見えるが、全体の定員が少なく、少数の学生の動向が反映されたものと考えられる。博士後期課程については、2024 年度は短期修了者がおり、2 年での学位取得の結果が反映されている。

4－6 卒業生からの評価

学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力が、進学先や就職先でどのように役立っているかを、進学・就職から一定期間経過した卒業・修了生からの評価により明らかにするため、アンケートを実施しています。令和6年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

アンケート対象：令和2年度卒業生・修了生（卒業・修了から3年経過）

実施期間：令和7年1月1日～1月31日

実施方法：はがき郵送による案内、アンケートフォームによる回答

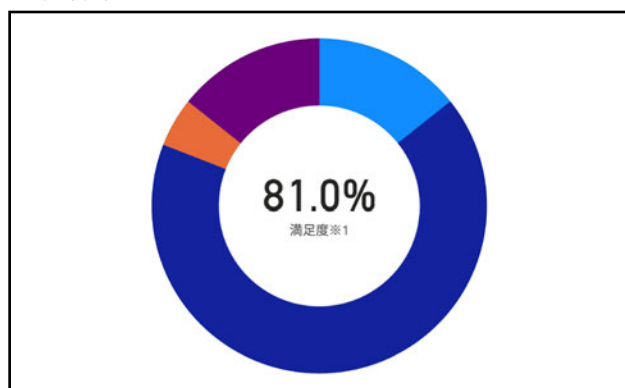
回答率：11.9%（卒業・修了者数からはがき未着数を除いた数を分母とした）

▶ 和歌山大学の教育内容全体に対する満足度について

※：満足度＝「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数／全回答数×100〔%〕

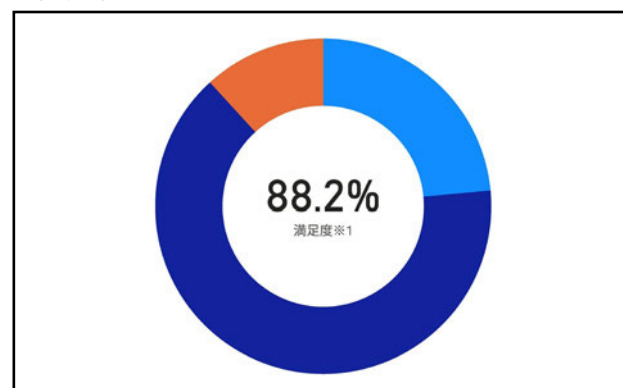
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

<教育学部>



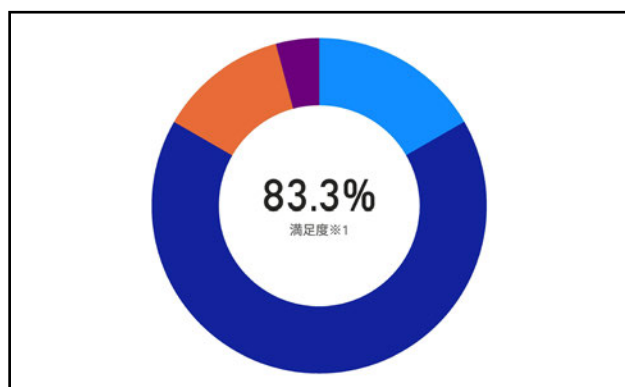
● 満足 14.3%
● どちらかといえば満足 66.7%
● どちらともいえない 4.8%
● どちらかといえば不満足 14.3%

<経済学部>



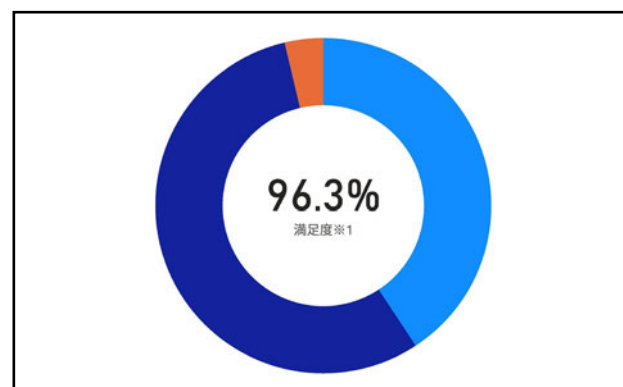
● 満足 23.5%
● どちらかといえば満足 64.7%
● どちらともいえない 11.8%
● どちらかといえば不満足 0.0%

<システム工学部>



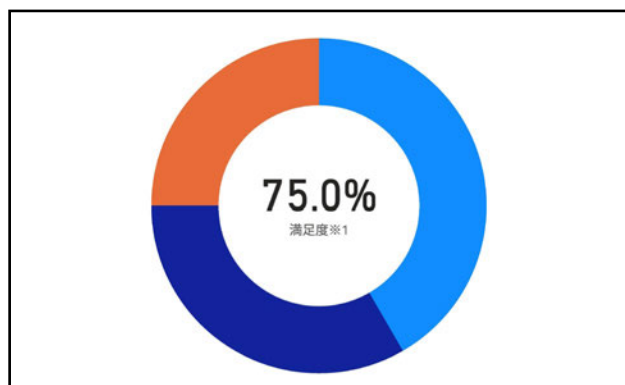
● 満足 16.7%
● どちらかといえば満足 66.7%
● どちらともいえない 12.5%
● どちらかといえば不満足 4.2%

<観光学部>



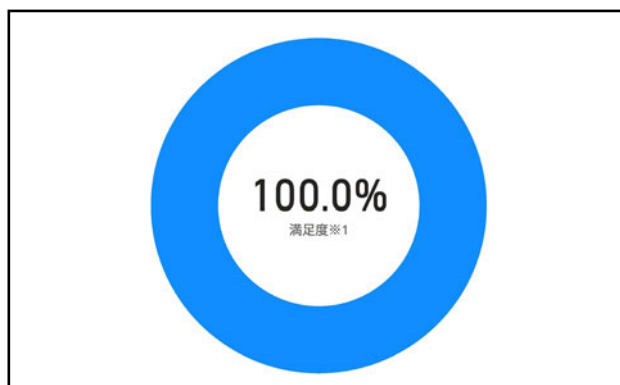
● 満足 40.7%
● どちらかといえば満足 55.6%
● どちらともいえない 3.7%
● どちらかといえば不満足 0.0%

<教育学研究科>



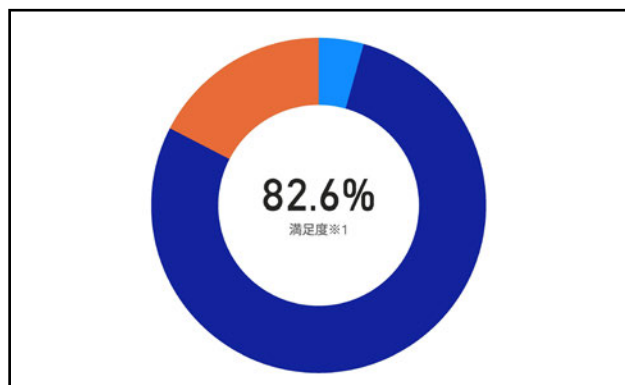
- 満足 41.7%
- どちらかといえば満足 33.3%
- どちらともいえない 25.0%
- どちらかといえば不満足 0.0%

<経済学研究科>



- 満足 100.0%
- どちらかといえば満足 0.0%
- どちらともいえない 0.0%
- どちらかといえば不満足 0.0%

<システム工学研究科（博士前期課程）>



- 満足 4.3%
- どちらかといえば満足 78.3%
- どちらともいえない 17.4%
- どちらかといえば不満足 0.0%

※観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため掲載していません。また、博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

アンケートの回答率が 11.9%と減少しており、回答者数を増やす努力をしていくことが、引き続き課題となっている。学部全体での満足度は、85.3%と少し減少しており、教育学部の満足度が昨年度より大きく下がっている（93.8%から 81.3%）。教育学部から教員以外に就職した者に限らず、教員就職者の「どちらかといえば不満足」の者もいることから、その理由の分析が必要である。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、満足度は8割を超えているが、どちらかといえば不満足という割合が他学部等より多い。当該卒業生は4年次に COVID-19 による影響で学校現場での活動が大きく制限され、教育実習や学校ボランティア等に大きな制限がかかったこと、また、学校現場が混乱する中で想定外の事態が発生しており、これまで学んだことが活かせないという戸惑いが大きかったのではないかと考えられるが、様々な事態に柔軟に対応できる資質・能力を育てられるよう、学生への指導を行いたい。
経済学部	回答数が少なく、分析・コメントには限界があることは前提であるが、「満足」および「どちらかといえば満足」の合計割合が88.2%と昨年度より大幅に上昇した。今年度は、昨年度数値の低かった製造業に所属の卒業生からの回答がないため、継続的に動向を注視していく必要はあるが、他の業種を見る限り、概ね卒業生からの評価は高いと判断できる。
システム工学部	アンケートの回答率が低いため、分析するのが難しいが、全体の満足度が他の学部比べて同程度（83.3%）であると考えている。
観光学部	「満足」と「どちらかといえば満足」をあわせると96.3%となった。これは前年度（94.1%）と同水準であり、不満足の回答は見られないことから、満足度の水準は総じて高いものと推察できる。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、どちらかといえば不満足という回答はないが、どちらとも言えないという回答が他学部等より多めになっている。ただし、母数が小さいため、こういった割合の上下が見えやすいところがある。学校での実際の課題から研究を起こしており、それらは困難な課題も多い。それらに対して高い基準で評価を行っていることがこの結果の原因の一つかもしれないが、引き続き、院生の満足度を上げるために丁寧な指導を行いたい。
システム工学研究科	アンケートの回答率が低いため、分析するのが難しいが、全体の満足度が他の研究科と比べ同程度（82.6%）であると考えている。

※回答数が極端に少ない学部等については分析が困難なため、分析コメントを掲載していません。

▶ 和歌山大学での学びを通して身についた①～⑦の資質や能力が、仕事や日常生活の中で役立っていますか。

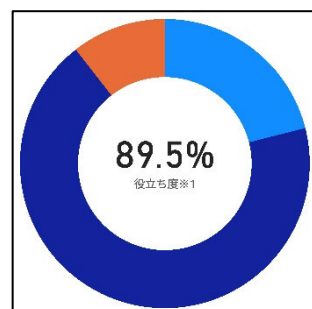
※：役立ち度＝「非常に役に立っている」と「どちらかといえば役に立っている」の回答数／全回答数×100〔%〕

端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

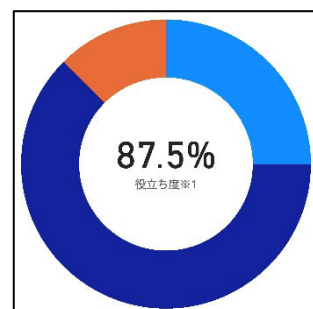
（学士課程）

①幅広い教養や倫理性

<教育学部>



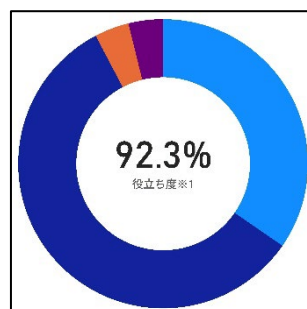
<経済学部>



<システム工学部>



<観光学部>



非常に役に立っている 21.1%
 どちらかといえば役に立っている 68.4%
 あまり役に立っていない 10.5%
 役に立っていない 0.0%

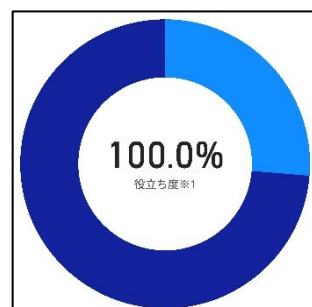
非常に役に立っている 25.0%
 どちらかといえば役に立っている 62.5%
 あまり役に立っていない 12.5%
 役に立っていない 0.0%

非常に役に立っている 10.0%
 どちらかといえば役に立っている 85.0%
 あまり役に立っていない 5.0%
 役に立っていない 0.0%

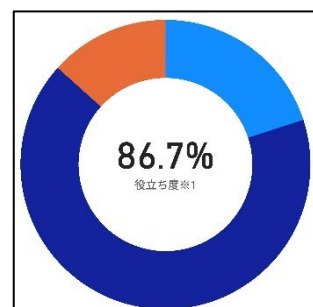
非常に役に立っている 34.6%
 どちらかといえば役に立っている 57.7%
 あまり役に立っていない 3.8%
 役に立っていない 3.8%

②知識や学力

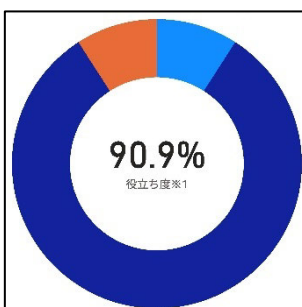
<教育学部>



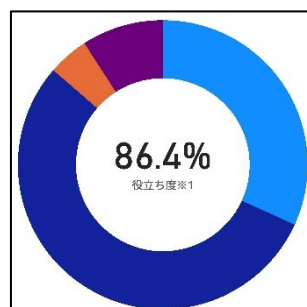
<経済学部>



<システム工学部>



<観光学部>



非常に役に立っている 26.3%
 どちらかといえば役に立っている 73.7%
 あまり役に立っていない 0.0%
 役に立っていない 0.0%

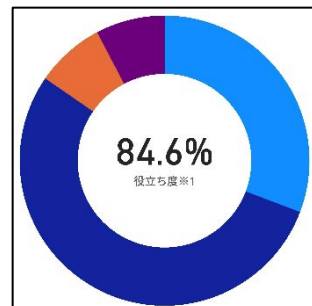
非常に役に立っている 20.0%
 どちらかといえば役に立っている 66.7%
 あまり役に立っていない 13.3%
 役に立っていない 0.0%

非常に役に立っている 9.1%
 どちらかといえば役に立っている 81.8%
 あまり役に立っていない 9.1%
 役に立っていない 0.0%

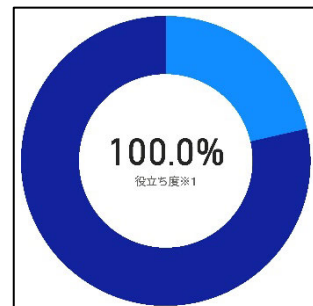
非常に役に立っている 31.8%
 どちらかといえば役に立っている 54.5%
 あまり役に立っていない 4.5%
 役に立っていない 9.1%

③主体性

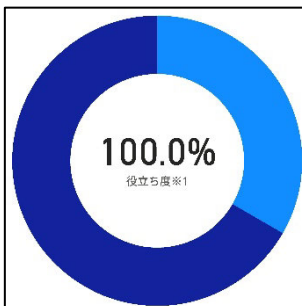
<教育学部>



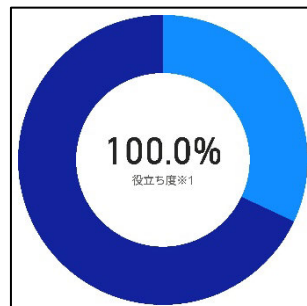
<経済学部>



<システム工学部>



<観光学部>



非常に役に立っている 30.8%
 どちらかといえば役に立っている 53.8%
 あまり役に立っていない 7.7%
 役に立っていない 7.7%

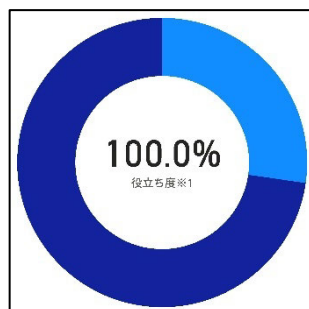
非常に役に立っている 21.4%
 どちらかといえば役に立っている 78.6%
 あまり役に立っていない 0.0%
 役に立っていない 0.0%

非常に役に立っている 33.3%
 どちらかといえば役に立っている 66.7%
 あまり役に立っていない 0.0%
 役に立っていない 0.0%

非常に役に立っている 32.0%
 どちらかといえば役に立っている 68.0%
 あまり役に立っていない 0.0%
 役に立っていない 0.0%

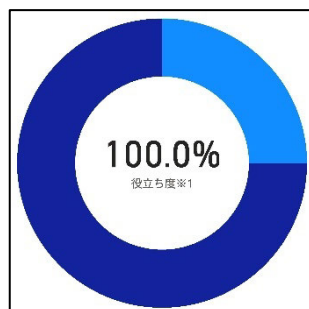
④創造力

<教育学部>



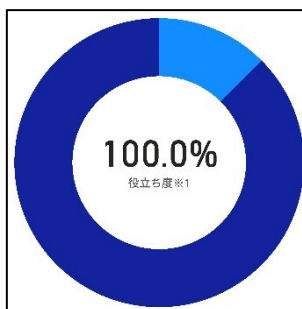
●非常に役に立っている 27.3%
●どちらかといえば役に立っている 72.7%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<経済学部>



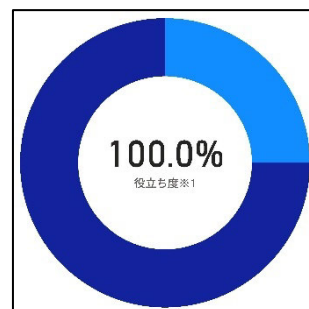
●非常に役に立っている 25.0%
●どちらかといえば役に立っている 75.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学部>



●非常に役に立っている 12.5%
●どちらかといえば役に立っている 87.5%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

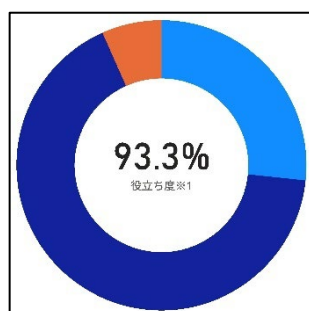
<観光学部>



●非常に役に立っている 25.0%
●どちらかといえば役に立っている 75.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

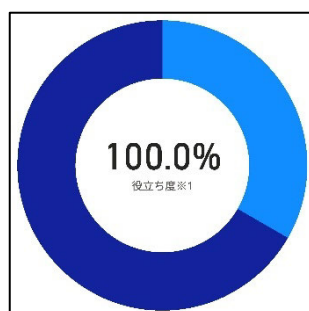
⑤実践力

<教育学部>



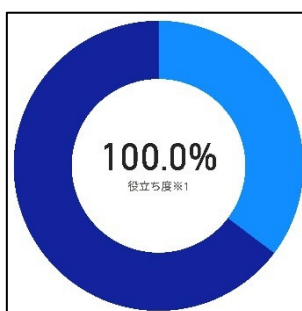
●非常に役に立っている 26.7%
●どちらかといえば役に立っている 66.7%
●あまり役に立っていない 6.7%
●役に立っていない 0.0%

<経済学部>



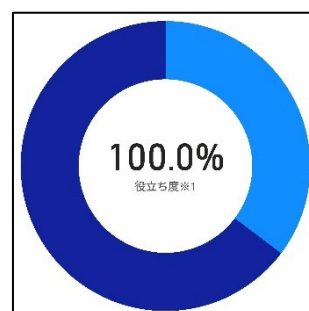
●非常に役に立っている 33.3%
●どちらかといえば役に立っている 66.7%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学部>



●非常に役に立っている 35.3%
●どちらかといえば役に立っている 64.7%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

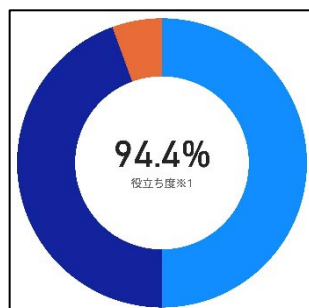
<観光学部>



●非常に役に立っている 21.7%
●どちらかといえば役に立っている 78.3%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

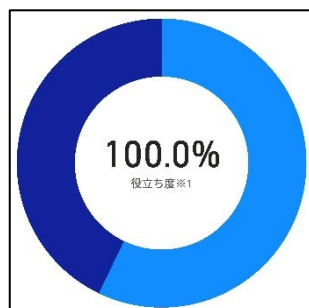
⑥コミュニケーション力

<教育学部>



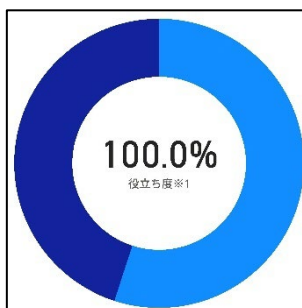
●非常に役に立っている 50.0%
●どちらかといえば役に立っている 44.4%
●あまり役に立っていない 5.6%
●役に立っていない 0.0%

<経済学部>



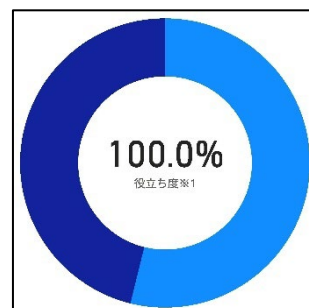
●非常に役に立っている 57.1%
●どちらかといえば役に立っている 42.9%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学部>



●非常に役に立っている 55.0%
●どちらかといえば役に立っている 45.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

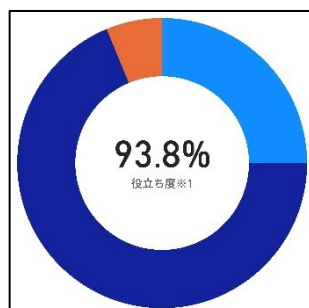
<観光学部>



●非常に役に立っている 53.8%
●どちらかといえば役に立っている 46.2%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

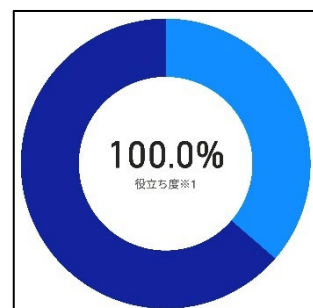
⑦多角的な思考力

<教育学部>



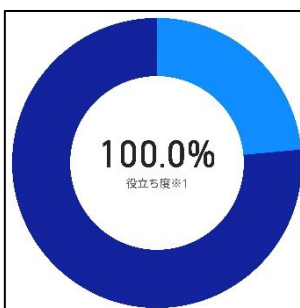
●非常に役に立っている 25.0%
●どちらかといえば役に立っている 68.8%
●あまり役に立っていない 6.3%
●役に立っていない 0.0%

<経済学部>



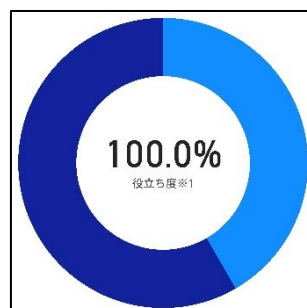
●非常に役に立っている 36.4%
●どちらかといえば役に立っている 63.6%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学部>



●非常に役に立っている 23.5%
●どちらかといえば役に立っている 76.5%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

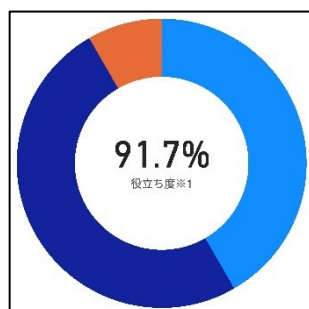
<観光学部>



●非常に役に立っている 41.7%
●どちらかといえば役に立っている 58.3%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

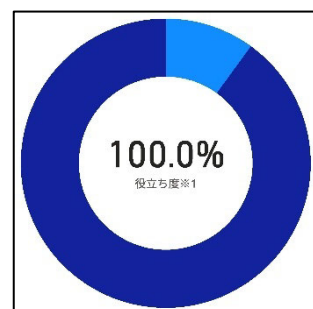
⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

<教育学部>



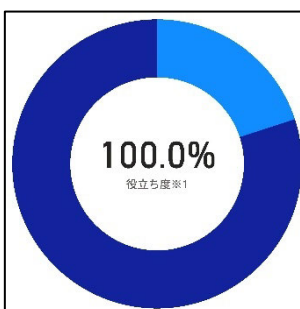
●非常に役に立っている 41.7%
●どちらかといえば役に立っている 50.0%
●あまり役に立っていない 8.3%
●役に立っていない 0.0%

<経済学部>



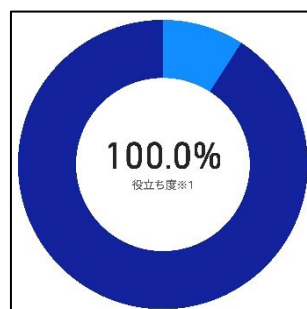
●非常に役に立っている 10.0%
●どちらかといえば役に立っている 90.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学部>



●非常に役に立っている 20.0%
●どちらかといえば役に立っている 80.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<観光学部>

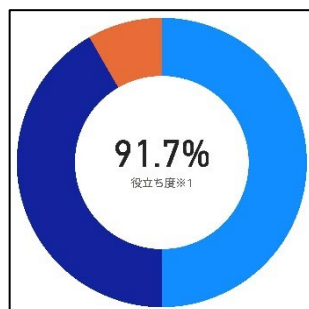


●非常に役に立っている 9.1%
●どちらかといえば役に立っている 90.9%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

(修士・博士課程)

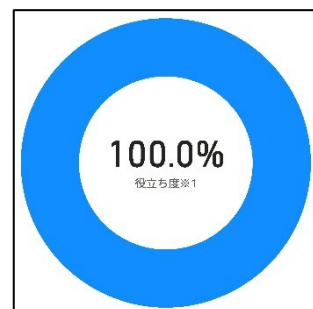
①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

<教育学研究科>



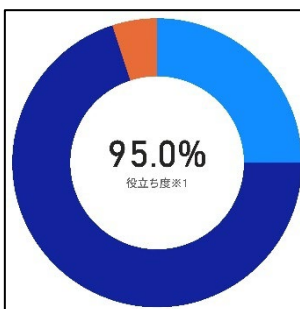
●非常に役に立っている 50.0%
●どちらかといえば役に立っている 41.7%
●あまり役に立っていない 8.3%
●役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



●非常に役に立っている 100.0%
●どちらかといえば役に立っている 0.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

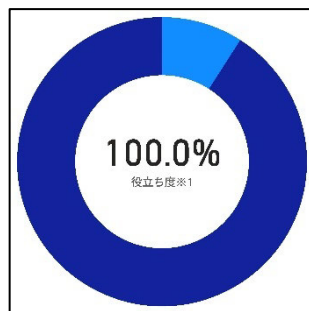
<システム工学研究科>



●非常に役に立っている 25.0%
●どちらかといえば役に立っている 70.0%
●あまり役に立っていない 5.0%
●役に立っていない 0.0%

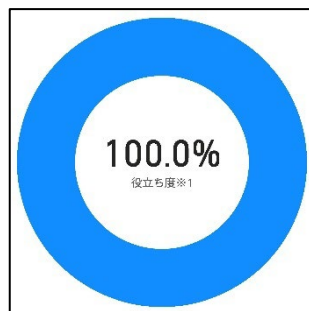
②高い人権意識や倫理観

<教育学研究科>



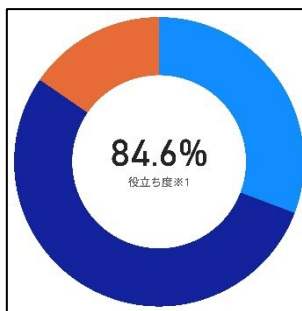
- 非常に役に立っている 9.1%
- どちらかといえば役に立っている 90.9%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



- 非常に役に立っている 100.0%
- どちらかといえば役に立っている 0.0%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

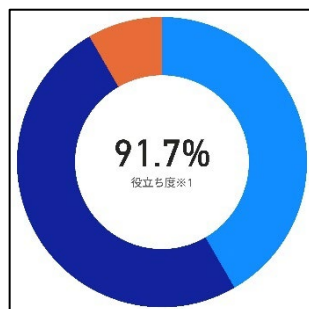
<システム工学研究科>



- 非常に役に立っている 30.8%
- どちらかといえば役に立っている 53.8%
- あまり役に立っていない 15.4%
- 役に立っていない 0.0%

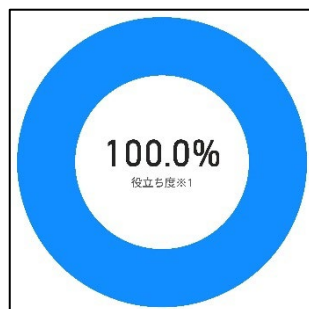
③課題解決能力

<教育学研究科>



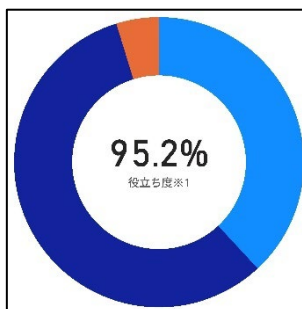
- 非常に役に立っている 41.7%
- どちらかといえば役に立っている 50.0%
- あまり役に立っていない 8.3%
- 役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



- 非常に役に立っている 100.0%
- どちらかといえば役に立っている 0.0%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

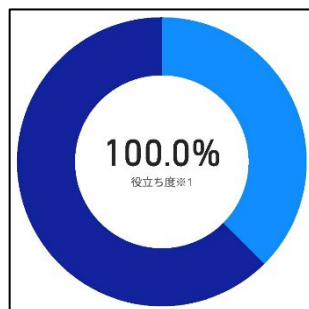
<システム工学研究科>



- 非常に役に立っている 38.1%
- どちらかといえば役に立っている 57.1%
- あまり役に立っていない 4.8%
- 役に立っていない 0.0%

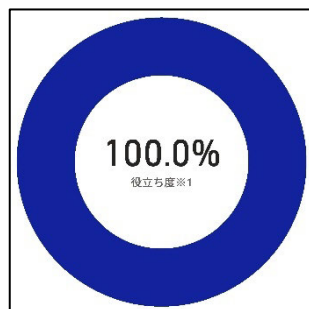
④リーダーシップを発揮する力

<教育学研究科>



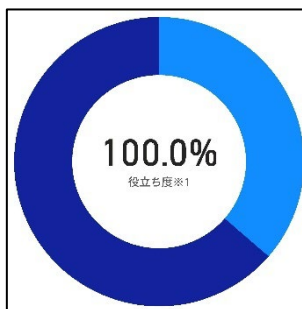
- 非常に役に立っている 37.5%
- どちらかといえば役に立っている 62.5%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



- 非常に役に立っている 0.0%
- どちらかといえば役に立っている 100.0%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

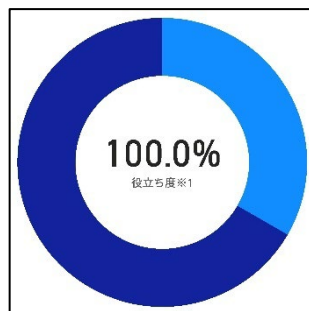
<システム工学研究科>



- 非常に役に立っている 36.4%
- どちらかといえば役に立っている 63.6%
- あまり役に立っていない 0.0%
- 役に立っていない 0.0%

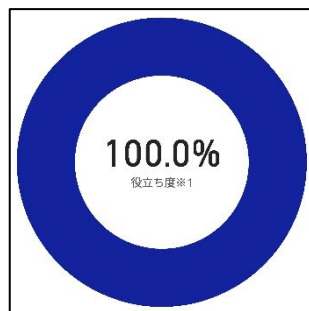
⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

<教育学研究科>



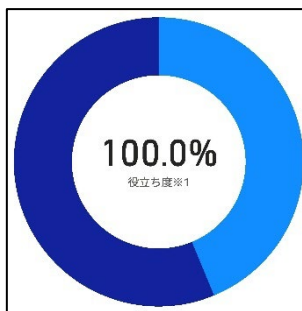
●非常に役に立っている 33.3%
●どちらかといえば役に立っている 66.7%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



●非常に役に立っている 0.0%
●どちらかといえば役に立っている 100.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

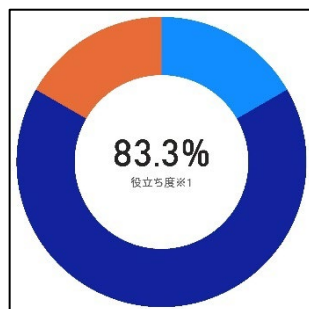
<システム工学研究科>



●非常に役に立っている 43.8%
●どちらかといえば役に立っている 56.3%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

⑥分析し、改善・応用する力

<教育学研究科>



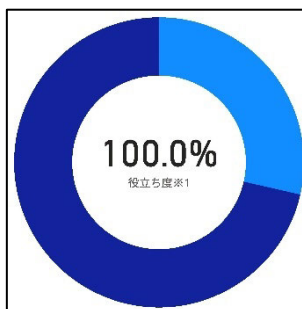
●非常に役に立っている 16.7%
●どちらかといえば役に立っている 66.7%
●あまり役に立っていない 16.7%
●役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



●非常に役に立っている 100.0%
●どちらかといえば役に立っている 0.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

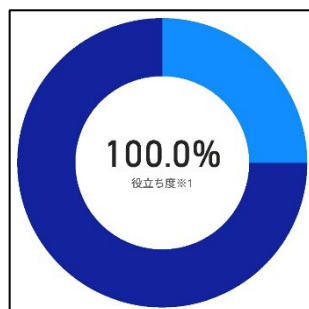
<システム工学研究科>



●非常に役に立っている 28.6%
●どちらかといえば役に立っている 71.4%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

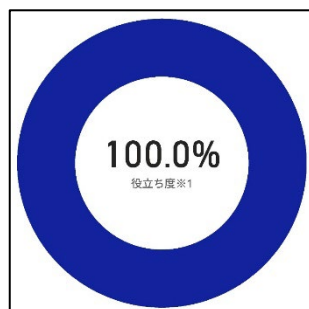
⑦コミュニケーション力

<教育学研究科>



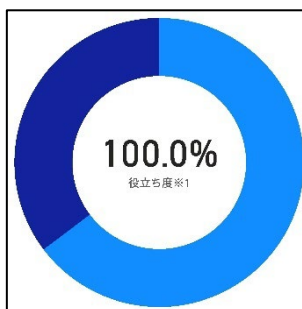
●非常に役に立っている 25.0%
●どちらかといえば役に立っている 75.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<経済学研究科>



●非常に役に立っている 0.0%
●どちらかといえば役に立っている 100.0%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

<システム工学研究科>



●非常に役に立っている 64.7%
●どちらかといえば役に立っている 35.3%
●あまり役に立っていない 0.0%
●役に立っていない 0.0%

※観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため掲載していません。また、博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

学部については、「①幅広い教養や倫理性」と「②知識・学力」についての割合が、他の設問よりも低い結果となっている。教養教育も含めて、学部における教養や知識・学力の育成に課題がある。また、全体的に教育学部の回答が、他学部に比べて低い傾向が見られる。

その一方で、4－7「卒業生に対する評価」について企業からの回答は、すべての項目で90%以上が「身につけている」と評価されている。授業科目やゼミナール等での学生指導において、どの授業科目や指導が、どういった資質や能力の育成を目的としており、どのように評価しているのかを明らかにすることで、学生自身にも自己の資質や能力を適切に自己評価できるようにすることが今後の課題であると言える。

<各学部等からの分析結果>

学部等	分析コメント
教育学部	e-annual report のデータより分析した結果、おおむね良好な結果だが項目3「主体性」や項目8「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」で他学部等より低くなっているのが目立つ。ICT 活用に関しては他の章でも同じ傾向が出ている。主体性が低めに出ているのは、将来教員になる人を育てている学部として課題として受け止めないといけない。目的養成の学部としてのカリキュラムの忙しさが裏目に出たのかもしれないが、あらためて丁寧な指導を検討したい。
経済学部	回答者数が少ないことに留意する必要があるが、「幅広い教養や倫理性」と「知識や学力」以外は、「非常に役に立っている」と「どちらかといえば役に立っている」を合わせた回答は100%に達しており、学部教育の一定の目的は達成できていると考えられる。「幅広い教養や倫理性」と「知識や学力」は8割を超えているため特に問題というわけではないが、講義や研究指導の中で意識的に両資質・能力の修得を図っていく必要があると考えられる。
システム工学部	どの項目についても「非常に役に立っている」「どちらかといえば役に立っている」との回答が大部分であり、多くの卒業生が役に立っていることがわかる。
観光学部	大半の項目が前年度より高水準の回答結果となっており、学部での学びや身につけた資質が就職先や進学先においても少なからず活かされていることが窺える。
教育学研究科	e-annual report のデータより分析した結果、おおむね良好だが項目6「分析し、改善・応用する力」が他研究科等に比べて低い数字である。4-3「学位プログラムを通じた資質・能力等の修得状況」での項目6「分析し、改善・応用する力」の低めの結果と呼応している。研究として取り上げる、教育現場での課題の難しさが反映しているのかもしれないが、引き続き丁寧に分析し、改善・応用する力の養成に取り組むたい。

システム工学研究科	ほとんどの項目についても「非常に役に立っている」「どちらかといえば役に立っている」との回答が大部分であり、多くの修了生が役に立っていることがわかる。「高い人権意識や倫理観」の項目（84.6%）が他の項目と比べやや低い。システム工学研究科では令和４年度より、「技術者倫理」を必修として新たに開講し、さらに令和６年度には内容を刷新している。また、令和６年度から研究倫理教育を毎年実施しているので、徐々に評価が改善していくと期待される。
-----------	--

※回答数が極端に少ない学部等については分析が困難なため、分析コメントを掲載していません。

4-7 卒業生に対する評価

企業等に採用された本学卒業生が学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力等について、合同企業説明会参加企業にアンケートを実施しています。令和6年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

アンケート対象：2026卒向け和歌山大学合同企業説明会参加企業

実施期間：令和7年2月～3月

実施方法：Microsoft Formsのアンケート機能による実施

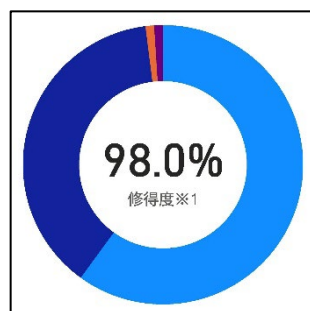
回答企業数：199社（うち、本学卒業・修了生が在籍している企業79.4%）

▶ 採用された和歌山大学卒業生が、次の資質や能力を身につけていると思いますか。

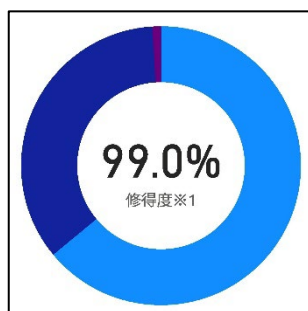
※：修得度＝「身につけている」と「ある程度身につけている」の回答数／全回答数×100〔%〕

端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

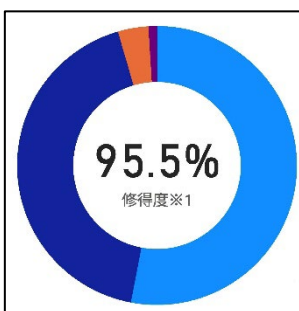
①幅広い教養や倫理性



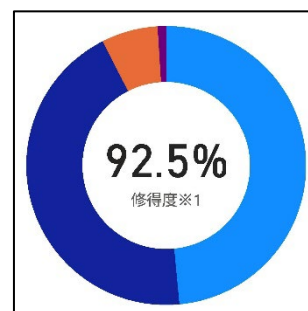
②知識や学力



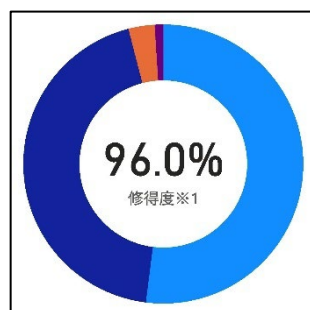
③主体性



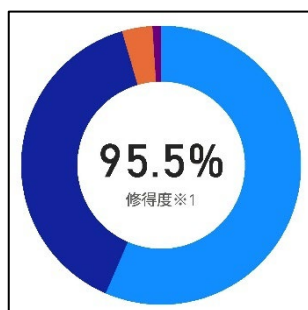
④創造力



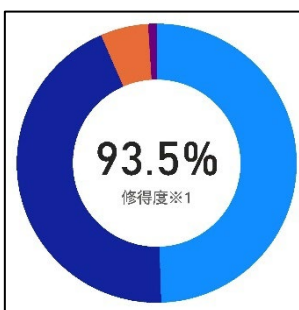
⑤実践力



⑥コミュニケーション力



⑦多角的な思考力



⑧ICT機器の活用能力や
情報リテラシー

